戦後横浜の「混血孤児」問題と聖母愛児園の活動

西村 健

はじめに

敗戦後、多数の占領軍兵士が駐留した神奈川県では、1945年(昭和20)11月の県議会で「混血児」 問題が取り上げられるなど、早い段階で問題が生じることが憂慮されていた²が、1946年(昭和21)3月にGHQ/SCAP公衆衛生福祉局局長クロフォード・F・サムズ大佐が「混血児」の公的保護を否定したほか、占領軍によって「混血児」問題に関する調査、報道も規制³されたため、本問題は事実上野放しとなっていた。県議会での懸念通り、横浜の町では「混血児」の子どもたちが多数、街に置き捨てられたほか、育児放棄をされて死亡する悲劇が生じることとなる。

これら「混血孤児」たちの保護に大きな役割を果たした施設が、民間児童養護施設である神奈川県大磯町のエリザベス・サンダース・ホーム(現社会福祉法人 エリザベス・サンダース・ホーム)と横浜市中区の聖母愛児園(現社会福祉法人 キリスト教児童福祉会 聖母愛児園)および、大和町(現大和市)に設立された同園の分園ファチマの聖母少年の町(以下、少年の町)である。全国的に知られたエリザベス・サンダース・ホームに比べ、聖母愛児園・少年の町の存在は、施設の果たした役割の大きさと比較して

知られることが少なく、戦後史の影に埋もれていたが、当館では2015年(平成27)から同園の調査を行い、その成果を公表してきた。この取り組みによってメディアでの報道が行われるようになり、同園の歴史に光が当たりつつある。そこで本稿では、横浜における「混血孤児」問題の序論として、筆者が現在までに調査をした聖母愛児園に関する①公的記録、②記念誌や新聞・雑誌資料の記録、③聖母愛児園所蔵資料の3点から、同園の活動の概要と特色について紹介したい。

研究史整理

戦後期における「混血児」問題については、加納実紀代4がGHQ/SCAPと日本政府の政策を整理し、地域における「混血児」保護の実態や表象の問題を包括的に考察しているほか、嶺山敦子5が婦人運動家、久布白落実の論稿を通して「混血児」問題を分析している。また、下地ローレンス吉孝6によって戦後における「混血児」問題が社会学の観点から総括された。地域の事例に関しては、田代国次郎7が広島県の資料をもとに「混血孤児」保護の実態について論じている。また、藤井常文8は東京都の福生町(現福生市)における「混血孤児」保護施設開設に

^{1 「}混血児」の語は差別的用語として「国際児」、「アメラジアン」などの言い換えが進められているが、本稿では戦後期に公的にも使用されていた歴史的用語として括弧つきで「混血児」と表記し、「混血児」の孤児を「混血孤児」と表記する。

² 出岡 学「狩り込みと性病院 - 戦後神奈川の性政策 - 」恵泉女学園大学平和文化研究所編『占領と性―政策・実態・表象』(インパクト出版会、2007年)。

³ 加納実紀代「『混血児』問題と単一民族神話の生成」恵泉女学園大学平和文化研究所、前掲書。

⁴ 加納前掲論文。

⁵ 嶺山敦子「戦後の『混血児問題』をめぐって-久布白落実の論稿を中心に-」『社会福祉学』(第52巻4号、2012年)。

⁶ 下地ローレンス吉孝『「混血」と「日本人」-ハーフ・ダブル・ミックスの社会史-』(青土社、2018年)。

⁷ 田代国次郎「戦後日本の売春問題3:広島県内の売春問題を中心に」『行政社会論集』(第4巻第1号、1991年6月)。

⁸ 藤井常文「国際児の養護にとりくんだ福生ホーム - 施設養護から国際養子縁組へ - 」浅井春夫・水野喜代志編『戦争孤児たちの戦後史』(第3巻東日本・満州編、吉川弘文館、2021年)。

至る経緯を資料から紐解き、その特性を明らかにした。神奈川県の事例では、古典的研究として評論家の神崎 清⁹による厚生省調査記録の分析があり、近年では上田誠二¹⁰によって大磯町の「混血孤児」保護施設、エリザベス・サンダース・ホームと聖ステパノ小学校の創立者である澤田美喜による「混血児」教育の特質が明らかにされている。

横浜市の事例については、東野伝吉¹¹が写真家、奥村泰宏の写真集の中で聖母愛児園および横浜の「混血児」の実態に関して資料から考察しているほか、自治体史の『横浜市史Ⅱ』では、前田一男¹²によって、市内の「混血児」問題および元街小学校における「混血児」教育の取り組みについて詳述されている。また、小山景子¹³によって戦後期の「混血児」政策の概要と聖母愛児園における保護児童の就学問題について詳しい分析がなされた。この他、長年にわたり横浜の「混血児」問題を追及してきた作家、山崎洋子¹⁴によって、聖母愛児園資料を用いた調査成果を含む著書が刊行されている。

少年の町に関しては、『大和市史』に施設建設反対運動に関する記述がなされているほか、『大和市市史研究』において同園関係者のインタビュー記事が掲載されている¹⁵。また、有賀ゆうアニース¹⁶は、一連の「混血児」問題に関

する社会学的研究の中で、少年の町園児の入学 拒否事件を取り上げ、詳細な分析を行っている。 このほか、当館の出版物・紀要において、聖母 愛児園・少年の町に関する資料紹介を継続して 行ってきたが、聖母愛児園所蔵資料や少年の町 関連資料、および関係者の聞き取り調査記録な どの一次資料から分析を行った歴史学的研究は 皆無であり、研究の余地を十分に残している。 本稿ではその端緒として、筆者が現在までの調 査で得た知見の一部を明示したいと考える。

聖母愛児園・ファチマの聖母少年の 町の調査経緯

本論に入る前に、当館による聖母愛児園と少年の町に関する調査経緯について述べたい。筆者が本調査を始めた契機は、2015年(平成27)より、次年度企画展準備のため市内各地の社会福祉法人施設の調査を実施したことにある。本調査の中で、神奈川新聞社の三木 崇記者と聖母愛児園を訪ねたところ、同園事務長(現施設長)の工藤則光氏の案内により、多数の戦後占領期の資料が同園に保存されていることが明らかとなった¹⁷。また、少年の町建設に関する住民の反対運動関係資料がカトリック横浜司教区に保存されていることも確認し、調査成果を本紀要第12号¹⁸で公表した。この後、聖母愛児園・

⁹ 神崎清『夜の基地』(河出書房、1953年)。神崎は第1章で詳述する、中央児童福祉審議会に招聘された「混血児問題対策研究会」のメンバーであった。

¹⁰ 上田誠二a「占領・復興期の『混血児』教育:人格主義と平等主義の裂け目」『歴史学研究』(第920号、2014年7月)、b 『「混血児」の戦後史』(青弓社、2018年)、c 「戦争孤児としての『混血児』 - エリザベスサンダースホームと聖ステパノ学園の実践 - 」 浅井春夫・川満 彰編 『戦争孤児たちの戦後史』(第1巻総論編、吉川弘文館、2020年)。

¹¹ 奥村泰宏(写真)・東野伝吉(文)『敗戦の哀歌-ヨコハマ・フォト・ドキュメント-』(有隣堂、1981年)。

¹² 前田一男「『混血児』の児童への対応」横浜市総務局市史編集室編『横浜市史Ⅱ』(第二巻〔下〕第6編第3章4、横浜市、2000年)。

¹³ 小山景子「戦後神奈川県における『混血児』教育問題」『年報 首都圏史研究2012』(第2号、2012年)。

¹⁴ 山崎洋子『女たちのアンダーグラウンド-戦後横浜の光と闇-』(亜紀書房、2019年)。

¹⁵ 大和市議会編・発行『大和市議会史』(資料編2、1987年)、大和市編・発行『大和市史3』(通史編 近現代、2002年)、トマス・トランブレ・大久保昌子・高野和基「聞き書き=ファチマの聖母少年の町 (Boys Town)」『大和市史研究』(第21号、1995年)。

¹⁶ 有賀ゆうアニースa「差異を問題化する/しない方法: 戦後日本における『混血』の概念分析」(修士学位論文、2020年)、b「戦後『混血児問題』における〈反人種差別〉の論理―『混血児』概念の文脈と用法に着目して」(日本社会学会大会第94回大会報告資料、2021年)、c「『混血児』をめぐる人種的想像力と教育権の限界: 神奈川県における入学拒否事件をめぐって」(「想像力」研究会 2021年度第4回研究会報告資料、2021年)。

¹⁷ 三木記者による調査成果は、2015年8月12日付『神奈川新聞』に掲載された。筆者はこの後も工藤氏の協力により、同園資料の調査を継続している。

¹⁸ 拙稿「戦後横浜の社会福祉事業 - 引揚者、浮浪児・戦争孤児、『混血孤児』の保護を中心として - 」『横浜都市発展記念館紀要』 (No.12、2016年3月)。

カトリック横浜司教区所蔵資料を当館の企画展「焼け跡に手を差しのべて一戦後復興と救済の軌跡一¹⁹」(2016年10月22日~2017年1月15日)で初公開する。また、展示期間中、聖母愛児園で園児たちを養育したシスター(社会福祉法人聖母会 聖母の園在籍)各位に来館をいただき、当時の話を伺う機会を得た。

企画展終了後、カトリック横浜司教区の白井 啓道氏より聖母愛児園・少年の町卒園生のアフ ターケア施設「聖ヨゼフ寮」の存在を教示され、 卒園生たちのアフターケアを行う石川琢馬氏を 紹介される。2017年(平成29)5月27日に石川 氏が当館に来館され、詳細な聞き取り調査を行い、毎年横浜市内で開催される少年の町卒園生 のOB会の招待を受ける。翌月、筆者は少年の 町OB会に出席し、この会で出会った青木ロバァ ト氏をはじめ卒園生各位への聞き取り調査を開 始する。また、聖母の園において聖母愛児園の シスター各位に対する聞き取り調査も行い、調 査成果を国史学会大会²⁰において報告した。

翌2018年(平成30)、聖母愛児園・少年の町 卒園生の長老格である宮寺信良氏に聞き取り調査を行ったところ、少年の町の歴史資料の保存を当館に依頼され、同氏所蔵の3,540点に及ぶ聖母愛児園・少年の町関係写真が寄贈される。同時期に、聖母愛児園の園児を多数撮影した写真家、奥村泰宏の写真も当館に寄贈された。その後、当館の企画展「奥村泰宏・常盤とよ子写真展 戦後横浜に生きる²¹」(2018年10月6日~12月24日)において、奥村泰宏撮影聖母愛児園写真および宮寺氏寄贈写真を聖母愛児園所蔵資料とともに展示し、同時開催の関連展示「聖母

愛児園分園『ファチマの聖母少年の町』の記録²」において、少年の町関連の寄贈写真を初公開する。翌2019年(平成31)に青木氏より、生き別れとなった聖母愛児園卒園生の妹マリ氏の消息を探ることを依頼されたため、筆者は同園の工藤氏の協力を得て同園資料を調査し、調査成果を同年の少年の町OB会において青木氏に報告する。また、同会において、少年の町の記録写真を長年撮影されていた中野正義氏より、写真資料寄贈の打診を受け、141点の寄贈を受け入れる。

翌2020年(令和2)2月、筆者は朝日放送テレ ビ報道局の猿渡研二氏より取材を受け、青木氏 と当館所蔵資料を紹介し、11月23日に青木氏出 演の「戦争が生んだ子どもたち」が放送される。 また、10月にNHK制作局の福田紗友里氏の取 材を受け、青木氏を紹介したほか、11月に福田 氏とヨゼフ寮に赴き、石川氏と卒園生各位を紹 介した。以後、資料調査等で全面的に協力し、 翌2021年 (令和3)、NHK Eテレのハートネット TVで「ぼくらは"戦友"だった~ボーイズ・タ ウンの子どもたち~ | (8月9日初回放送) が放 送される。この番組が好評であったため、拡大 番組であるETV特集「ずっと、探し続けて~ "混血孤児"とよばれた子どもたち~ | (11月 27日初回放送)の放送が決定し、追加取材とし て青木氏の妹マリ氏の行方を追う試みをNHK が行い、当館が提供した聖母愛児園資料等をも とに番組で調査が進められ消息が判明する。

また、本番組の放送前に、当館の企画展「後世に残したい都市横浜の宝館蔵コレクション展」(2021年1月16日~3月28日)が開催され、

¹⁹ 本企画展の詳細は、横浜都市発展記念館編『焼け跡に手を差しのべて-戦後復興と救済の軌跡-』(公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、2016年)を参照されたい。

²⁰ 報告タイトル「戦後横浜の戦争被害者保護を担った民間社会事業団体」(平成29年度 国史学会大会第4部会〔近現代史〕、2017年6月19日開催)。

²¹ 本企画展の詳細は、横浜都市発展記念館編『奥村泰宏・常盤とよ子写真集 戦後横浜に生きる』(公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、2018年) および、上田誠二「敗戦の街・赤線の街に佇んで-展示評:横浜都市発展記念館『戦後横浜に生きる奥村泰宏・常盤とよ子写真展』-」『歴史評論』(第835号、2019年11月) を参照されたい。

²² 本展の詳細は、拙稿「資料紹介 聖母愛児園・ファチマの聖母少年の町記録写真」『横浜都市発展記念館館報 ハマ発 Newsletter』(第33号、2020年1月) を参照されたい。

宮寺氏寄贈写真と初公開となる中野氏の寄贈資料群を展示し、卒園生各位の来館を得たほか、9月開催の地方史研究協議会シンポジウム²³において、現在までの筆者の調査成果を公表した。

以上のように、当館では施設関係者各位のご協力のもとで諸種の成果を重ねてきた。本問題は当事者の思いに寄り添いながら情報の公開を進めなければならないテーマであるため、慎重を期す必要があることは明白であるが、朝日放送テレビやNHKの番組で関係者各位が実名で自らの体験を語ったことは、本テーマを世間に周知する大きな契機であると筆者は考える。施設関係者各位は、施設の歴史が忘れられることなく継承されることを希望されているため、今後は筆者が得た知見や聞き取り調査記録を、本紀要をはじめとした様々な媒体で公開してゆく予定である。

第1章 公的資料にみる神奈川県の 「混血孤児」問題と 聖母愛児園の活動

占領期においては、「混血児」問題を政府が取り上げることは意図的に避けられていた。しかし、講和条約発効直前の1952年(昭和27)3月に、参議院議員の山下義信によって全国の「混血児」数の調査が厚生省児童局に要請されたことに加え、マスコミが本問題を頻繁に取り扱ったことなどから、本問題の主務官庁である厚生省は、当時全国に20万人存在すると推定されていた「混血児」の実態把握に加え、この時期学齢期に達する「混血児」の児童を日本人児童と同じ学校に就学させるべきか否かという問題を解決する必要に迫られた24。このため、同年3

月より厚生省児童局によって全国施設収容児児童調査が行われたほか、同年7月より厚生大臣の諮問機関、中央児童福祉審議会(以下、審議会)において第25~29回の5回にわたり本問題が審議され、答申が示されることになった。

審議会における「混血児」問題審議の詳細については、従来の研究²⁵では、新聞資料や外務省外交史資料館が所蔵する第25回審議会資料が用いられていたが、横浜市史資料室が所蔵する社会福祉法人乳児保護協会資料(以下、乳児保護協会資料)には、第25~29回の審議会関係資料が含まれており、より詳細な議論の内容や神奈川県の「混血児」の状況等が把握できる。本審議会記録は筆者が厚労省に問い合わせたところ、同省では保存されておらず、横浜市史資料室所蔵資料が管見の限り最も充実した資料群である。

本資料群の寄贈団体である乳児保護協会とは、関東大震災を契機として横浜市内の乳幼児保護を目的に設立された組織で、戦後も乳幼児保護やララ物資の配給、引揚者保護や母子家庭の保護などに尽力していた²⁶。代表の黒川フシは神奈川県を代表する社会事業家の一人であり、当時審議会委員を務めていたため、神奈川県に深く関係する「混血児」問題に関する資料を保存していたものと考えられる。本章では本資料群に記載された情報のうち、神奈川県と聖母愛児園に関する記述について紹介したい。

1952年(昭和27)7月9日に開催された第25回 審議会²⁷では、厚生省児童局により、「混血児」 問題に関する①経過、②実数調査、③法律関係、 ④保護の方法についての問題、⑤外国による援助等の議題が用意され、実数調査のあり方およ

²³ 報告タイトル「地域に残された戦後社会事業史関係資料の価値」(地方史研究協議会シンポジウム『非常時の記録保存と記憶化を考える-コロナ禍の〈いま〉、地域社会をどう伝えるか-』、2021年9月18日開催)。報告内容は、『地方史研究』(第415号、2022年2月)掲載の報告要旨を参照されたい。

^{24「}混血児問題について」(「第二十五回中央福祉審議会次第及配布資料」内文書〔横浜市史資料室所蔵乳児保護協会資料№73〕)。

²⁵ 小山前掲論文、下地前掲書など。

²⁶ 乳児保護協会編・発行『乳幼児の福祉を求めて四十年』(1974年)。

²⁷ 第25回審議会に関する記述は「第二十五回中央福祉審議会次第及配布資料」内文書(横浜市史資料室所蔵乳児保護協会資料No. 73) および「第二十五回中央児童福祉審議会議事録」(横浜市史資料室所蔵乳児保護協会資料No.75) を典拠とする。

び、保護の方法 (無差別平等か隔離保護か) に ついて議論がなされた。また、本審議会では、 厚生省児童局による「養護施設、乳児院に収容 されている白色、黒色混血児童の調査結果」が 配布された。本記録では、1952年(昭和27)3 月の時点で全国に482人の「混血孤児」が施設 に保護されていることが記されている。また、 このうち10名以上の「混血孤児」を保護してい る施設の一覧が提示され、神奈川県の聖母愛児 園が139人、エリザベス・サンダース・ホーム が102人、北海道札幌市の天使之園が24人、宮 城県仙台市の仙台天使園が15人、大分県別府市 の小百合愛児園が11人の「混血孤児」を保護し ていることが示された。この記録からは、聖母 愛児園とエリザベス・サンダース・ホームの保 護児童が全国で突出して多いことが把握でき る。本審議会では次同の審議会において政府関 係者と現場担当者を招聘し、「混血児」問題に ついてヒヤリングを行うことが決定される。資 料には、厚生・文部両省関係者、学識経験者、 施設代表、社会評論家を含む「混血児問題対策 研究会参加候補者氏名簿 |が付されており、様々 な有識者の声を集めようとする審議会の意図が 読み取れる。

続く同年8月13日の第26回審議会²⁸は、第25回審議会を受けて、「混血児」保護に関わる施設代表、関係各機関の関係者が招聘されて開催された。本審議会に招聘されたのは澤田美喜(エリザベス・サンダース・ホーム園長)、マリア・アロイジオ(聖母愛児園園長代理)、古屋芳雄(国立公衆衛生院長)、丸井玄信(東京都中央児童相談所長)、渡辺(神奈川県中央児童相談所所長)、渡辺(神奈川県中央児童相談所長代理、氏名不記載)、大島文義(文部省初等中等教育局初等教育課長)、吉田(外務省欧米局第一課長代理、氏名不記載)の8名で、神奈

川県の関係者が多いことが特徴である。同県が本問題の中心地であることを厚生省および審議 会委員が認識していたことの証左であるといえ よう。

本会議の冒頭では、澤田美喜によりエリザベス・サンダース・ホームで保護された「混血児」 出生の事情が語られ、知的障害児の多いこと、 養子縁組が困難であることが示された。この後、 アロイジオが聖母愛児園について設立経緯と現 状の課題について以下のように述べている。

わたくしの施設では両親のことは調べてい ない。警察署と児童相談所を通じて送られ てくる棄子、又は棄子になるような人を 預っている。わたくしの施設ははじめ病院 を経営していたが、昭和二一年四月に子供 をつれ、病院の雑役婦にしてほしいと云っ てきてその子供を預ることになり、その翌 年〔筆者註:翌月の誤りか〕三人の棄子が あり、それを引き取ったが、そのうちの一 人が混血児であった。こうして次第に警察 署、区役所等から混血児が送られてくるこ とになって、収容施設を開設したわけで す。そしていま施設には一六○名収容され ているが、そのうち混血児が一三五人お り、東洋人が二五名となっている。そして 本年九月(西洋では九月が新学期)には満 六歳になる子供が六人おり、修道会の学校 に入学することになっている。しかし黒人 は外に出すわけにはゆかないので困ってい る。混血児は町の学校に出すわけにはゆか ないが、一人父がロシヤ人、母が日本人の 混血児がおり、顔はロシヤ人に似ているが、 言葉は日本語しか話せないので、これは可 愛そうだからわたくし達は向うの教育をう けさせることにし、人の上に立てる学力を

²⁸ 第26回審議会に関する記述は「第二十六回中央児童福祉審議会議事録」(横浜市史資料室所蔵乳児保護協会資料No.75) を典拠とする。

つけてやりたいと思っている。わたくしの 施設は、修道会の規則で満八歳になると男 子は収容することができなくなっているの で、それ以後はカトリック経営の男子修道 会にいくことになるが、そこは日本人のみ の施設であるから混血児を収容する修道会 がいづれできることになろう。女子は結婚 するまでおくが、混血児ははじめてのこと でもあるが男子より問題が少いと思うが、 向うの教育をすることになっている。黒人 はどこの学校でも扱ってくれないが、来年 は見通しがつくといっていた。

アロイジオの発言は、同園の関係者が園の実 態について語った唯一の公的記録であり、同園 の歴史を考える点で重要な資料といえる。筆 者が同園のシスター各位に伺った話では、当 時、同園の児童の保護を担ったのは、ドイツ・ カナダ・ハンガリー・ポーランド・イギリスな ど様々な国籍の外国人のシスターたちであった が、アロイジオは日本人のシスターであり、数 年で各地を異動することが定められたシスター の中で、唯一聖母愛児園に専従して児童の保護 を担った人物であったという。このような理由 で外国人の園長ではなく、アロイジオが園長代 理として本会議に出席したことが推測できる。 アロイジオの発言では、聖母愛児園の園児は町 の学校には入れず、修道会の学校に入れる方針 であったことが記されているが、実際にカト リック経営のインターナショナルスクール、セ ント・ジョセフ・カレッジ(横浜市中区山手町 84、2002年廃校) に6名の園児が、第26回審議 会直後の9月に入学している29。また、黒人系 の児童の扱いが課題であることが併記されてお り、修道会のなかでも人種間の課題があったこ とがうかがえる。

女子に関しては、結婚するまで同園で保護す

る方針が示されているが、男子については、修 道会の規則によって満8歳以上の児童の保護が 同園で出来ないことが課題として挙げられてい る。「混血児を収容する修道会」の設置につい て言及されているが、これは後に同園の男子専 門の分園、少年の町として実現することになる。

この発言後、審議会委員により海外への移民 についての意見を問われ、澤田美喜は占領軍の 引き上げ前に米国の父親が責任をもって引き取 ることが望ましい旨の発言をし、ルーズベルト 夫人やパール・バック等の有力者やユニセフ・ 財界の支援を得ていることを語っている。この 件に関するアロイジオの発言は以下の通りであ る。

わたくしの方の修道会でも責任をとってほ しいと頼んだが、向うではたとえ黒人であっ ても米国人という証拠がない以上引き取っ てくれないということだった。そして両親 の住所、氏名とか、写真等を送ってほしい ということだったので、日本にいたときの 住所や写真等を調べてカトリック連盟の人 に渡したが、その後のことはまだ判らない。

この発言からは、エリザベス・サンダース・ホーム、聖母愛児園ともに「混血孤児」の親に 責任を取らせることが最善の方法であるとして、様々な手を尽くしていたことが把握できる。しかし、このような運動が功を奏したことを示す資料はなく、海外家庭への養子縁組へと方針を転換してゆくことになる。この他、審議会委員からは、聖母愛児園の教育について、日本の教育をしていないことについて質問があり、アロイジオは「向うの言葉が話せないのは不便なことだし、できれば団体の手を経て向うの国に入れてやりたいし、〔中略〕日本で暮すとしても向うの関係の仕事につくのではないかと思っ

²⁹ 神崎前掲書、284頁。

ている」と発言している。この時点では、日本 社会が成長した園児たちを受け入れることは想 定されず、将来的に海外での生活を違和感なく 送れるように教育がなされていたことがわか る。また、宗教との関係についても問われ、「子 供は預ると全部洗礼をうけることになっている ので、したがって洗礼をうけた以上わたくし達 に責任があるので、カトリック関係の人に限っ て引き渡すことになっている |と回答している。 同園の園児は入園後すぐに洗礼を受けており、 この慣習は1952年(昭和27)頃まで継続された³⁰。 現在でも卒園生たちは洗礼名で互いを呼び合っ ており、当時における一般の児童養護施設に比 べ同園の特殊な環境が浮き彫りとなっている。 本資料のアロイジオの発言からは、行政から何 の指針も与えられず、園児たちの将来について 独自に模索することを余儀なくされる施設の苦 悩を読み取ることができる。

本審議会後の1952年(昭和27)11月26日に開催された第27回審議会³¹では、実態調査の方法と調査項目が審議され³²、厚生省児童局による「混血児」の実数調査記録(①外国の軍人・軍属等を父に持ち日本人を母に持つ児童の調査結果表、②医師による混血児出産取扱数調査票、③混血児調査、④養護施設、乳児院に在所する混血児の府県別一覧表、⑤養護施設および乳児院に在所中の混血児調査について、⑥神奈川県中央児童相談所で取扱った混血児ケースに関する統計)が提示された。①の表は、未報告の地域もあるため不完全な数値³³であるが、全国の「混血児」数2,983人のうち、神奈川県は1,041人

(白人系が808人、黒人系が233人)で最も多く、 東京の940人、宮城県の121人、長崎県の112人 がこれに続く。本調査は厚生省が全国の約6万 1千人の助産婦と約1万1千人の産婦人科等の医 師に調査票を配布して、敗戦以来取扱った「混 血児 | 児童出生数を調査したもので、年齢・性 別・人種別の情報が記載された詳細な記録であ る。しかし、医師の記憶に基づく本調査の信憑 性は審議会でも疑問が呈されており、1952年(昭 和27) 当時の「混血児」の実数に近い数値を示 すと考えられるのが、③の一覧である。本資料 は全国社会福祉協議会連合会が児童委員の組織 網を通じて調査した結果であるが、東京・岐阜・ 和歌山が未報告であるなど、問題も多い。この 一覧では全国で1.644人の「混血児」が存在し、 そのうち553人が神奈川県在住であるという数 値が示されている³⁴。④では、施設に保護され ている混血孤児数の都道府県別一覧が示され、 神奈川県が268人で最も多く、東京の45人、北 海道の29人がこれに続くことが記載されてい る。この後、1953年(昭和28)2月に実施され た調査記録「『いわゆる混血児童』実態調査報 告書35 | では、「混血児 | 総数は3.972名で、東 京798名、神奈川787名が最も多く、福岡195名、 大阪156名、広島130名、京都126名がこれに続 く数値として示されている。厚生省の調査には 精度の疑問はあるものの、「混血児」、特に「混 血孤児」の多数が神奈川県に存在していたこと を物語っている。

「混血児」の実数が想定された20万人より大幅に少ないことを受け、同年12月23日開催の第

³⁰ 聖母愛児園所蔵「児童動静簿1」(第3章参照)記載情報による。

³¹ 第27回審議会に関する記述は「第二十七回中央福祉審議会次第及配布資料」内文書(横浜市史資料室所蔵乳児保護協会資料No. 75)を典拠とする。

³² 第27回審議会の議事録は、横浜市市史資料室所蔵乳児保護協会資料には含まれていないが、「第二十八回中央児童福祉審議会 議事録」(横浜市史資料室所蔵乳児保護協会資料No80) に第25~27回審議会の内容が簡潔に記されている。

³³ 第27回審議会で配布された本調査の一覧は、未報告地域を含むものであり、第28回審議会で正式な数値が記載された一覧が提示されたものと考えるが、横浜市史資料室所蔵乳児保護協会資料には含まれていない。神崎前掲書および「第二十八回中央児童福祉審議会議事録」(横浜市史資料室所蔵乳児保護協会資料No80)には、総数5,013人という数値が記載されている。

³⁴ 神奈川県では、本調査記録を社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会編・発行『神奈川県下における混血児の状況』(1952年7月) にまとめている。

³⁵ 横浜市史資料室所蔵乳児保護協会資料No.803-4。

28回審議会36では米国の援助によらない「混血 児! の保護が提案されたほか、無差別平等の教 育方針を推奨する意見が大勢を占める。「混血 児 問題を扱う最後の審議会である1953年(昭 和28)7月21日開催の第29回の審議会では、答 申の文言など細部が検討された37。この結果、 「混血児」問題に関する基本方針について、「混 血児 | が一般児童と差別されないよう、児童憲 章の精神に基づきすべての児童と平等に育てら れるべきであるという原則や、政府が「混血 児 問題の解決のために、海外と関連をもつ民 間団体・篤志家の協力を求めるとともに、問題 解決のための活動を極力促進し支援すること等 が審議会の答申として示され、これを受けた厚 生省によって、1953年(昭和28)8月に全国の 都道府県知事に対し本答申に従うよう指示が出 された38。このため、聖母愛児園の園児たちは 当初の予定とは異なり、同園のすぐ近隣にある 元街小学校に入学することになるが、生活習慣 の違いなどによって、多くの問題に直面するこ とになる³⁹。また、1953年(昭和28)にアメリ カで制定された難民救済法によって、翌年には 10歳以下の「孤児」の養子縁組移民を最大 4,000 人受け入れることができるようになり⁴⁰、聖母 愛児園では同年12月に園児16名が横浜のアメリ カ総領事館で入国査証を受け、アメリカへ養子 縁組のために渡航していった⁴¹。この後、同園 による養子縁組の取り組みは、政府の支援を受 けて本格化し、国内の修道会で育成するという 方針は大きく転換することになる。

審議会資料は神奈川県の「混血児」の実態を 把握する点でも有益な情報を含んでいる。第26 回の審議会に招聘された海老名正吾は、1939年(昭和14)に県立少年指導相談所の鑑別員に就任して以来、1968年(昭和43)に県立ひばりが丘学園の園長を退任するまで、神奈川県の児童福祉行政の要職を歴任した人物である。戦後占領期においては、第2代の神奈川県中央児童相談所長を務め、戦争孤児問題と「混血児」問題に奔走していた⁴²。本審議会で海老名は1948年(昭和23)の児童福祉法施行後に神奈川県中央児童相談所で扱った「混血児」の数値について以下のように報告している。

- (1) 法施行後いままでに神奈川県の相談所で取り扱った混血児の数は総数二八七人です。
- (2) 次に右の二八七人を国籍別に分けると ①白米一三五人、②黒米五五人、③カナダ 一人、④フィリッピン五人、⑤オーストラ リヤ二人、⑥ロシヤ三人、⑦ノルウェイー 人、⑧朝鮮二二人、⑨中国三人、⑩二世四 人、⑪人種不詳五六人 計二八七人となっ ている。人種不詳児の多いのは大部分が捨 子であることに起因している。
- (3) 次に右の二八七人の相談にきた動機原因を分けてみると

①棄子五四人、②経済的困難四九人、③周 囲の反対四九人、④母親の職業(風紀その 他)四一人、⑤関係清算三八人、⑥母の病 気一三人、⑦母の結婚(父以外と)一二人、 ⑧母の浮浪七人、⑨児童自身の問題五人、 ⑩児童の教育四人、⑪母の刑務所四人、⑫ 母の死亡二人、⑬不詳九人、計二八七人と なっている。

³⁶ 第28回審議会に関する記述は「第二十八回中央児童福祉審議会議事録」(横浜市史資料室所蔵乳児保護協会資料No80) を典拠とする。

^{37「}第二十九回中央児童福祉審議会議事録」(横浜市史資料室所蔵乳児保護協会資料No803)。

³⁸ 厚生省児童局編『児童福祉十年の歩み』(日本児童問題調査会、1959年) 75頁。

³⁹ 元街小学校の取り組みは、同校編・発行『研究紀要 混血児研究』(第2号、1959年3月) および拙稿前掲論文(註14) を参照されたい。

⁴⁰ 南川文里「ポスト占領期における日米間の移民とその管理 - 人の移動の 1952 年体制と在米日系人社会 - 」『立命館国際研究』 (第28巻第1号、2015年6月)。

^{41 1954}年12月18日付『読売新聞』(神奈川版B) 記事による。

⁴² 神奈川県民生部児童課編・発行『児童福祉のあゆみ-児童相談所25年史-』(1974年)。

- (4) 次に右の二八七人の来所時の母の数二八四人の職業の状況をみると
 - ①進駐軍関係五〇人、②風紀営業従事者四 〇人、③妾(いわゆるオンリーワン)三一 人、④無職一七人、⑤一般職業婦人一七人、 ⑥娼婦(いわゆるパンパン)一八人、⑦不 明一一一人、計二八四人となっている。
- (5) 次に右の母の数二八四人の受胎時の性関係をみると

①法的結婚は○で、②不挙式同棲一○六 人、③知人(雇用関係)四○人、④強姦五 人、⑤挙式同棲八人、⑥不明一○九人、計 二八四人となっている。

いま神奈川県の施設では約二八○人収容している。このうちには法施行前に預かった子供も含まれているので、結局右の数字の約半数を施設に預かっていることになる⁴³。

海老名の提示した数値からは、児童相談所で扱った「混血児」中、白人系や黒人系の児童が67%を占めており、「国籍不明児」とされている児童もこの中に多数含まれることが推測されるため、本問題が占領軍兵士の駐留によって生じたことを改めて認識することができる。また、来所理由は捨子を除くと経済的困難や周囲の反対によるものが多く、多くの女性たちが社会的偏見や困窮の果てに相談所を訪れたことが推測できる。

本審議会では売春女性を現わす「パンパン」の数が少ない理由についても質問が出され、これに対し渡辺中央児童相談所長代理が「さきほどの数字はすべて相談所に直接相談にきたものの数字であるので少ないのだと思う。施設の玄関に捨ててゆくのも相当あるし、また不明の中にもパンパンの数は混っていると思う。つまりパンパンというか同棲にもとづくものが多いの

です」と回答している。海老名の提示した数値では、法的に結婚した女性の数はなく、不挙式同棲が106名と最も多い。ここでは、正式な結婚関係にない男女の関係が、施設に保護する必要のある「混血孤児」を生み出す要因となっていることが把握できる。

神奈川県中央児童相談所以外に、県内の「混 血孤児」問題に関係した組織が神奈川県婦人更 生相談所である。筆者は本紀要16号4で同所に 勤務していた高橋芙蓉がまとめた県内における 売春女性の実態調査について紹介したが、この なかには売春女性たちが出産した「混血児」に 関する分析結果も含まれている。高橋が1952年 (昭和27) に発表した「売春に関する調査3題⁴⁵ | のうち、「C. 売春婦を母とする混血児について | では、1950年(昭和25)8月~1952年(昭和27)7 月の2か年の間に外国人を相手とした売春女性 1.776名の調査記録が掲載されている。ここで は、中絶・流産経験者が393人(22.1%)、生存 児を持つもの68名(白人系63名、黒人系5名) おり、68名の出生年、性別、就籍状況、養育状 況、母の出産時の年齢に関する一覧が記されて いる。このうち、養育状況の一覧には、本人が 養育している者が14名、親に引き取ってもらっ た者が9名、個人に委託し養育費を送っている 者が28名、養護施設収容中の者が11名、養子に 出した者が6名という数値が記されている。こ の状況に関し、高橋は以下のように分析してい る。

個人に委託してあるという人は、その養育 費の故に売春をつゞけるという。しかし実 際はこのなかには養護施設に預けている者 が少くない。

混血児の母には現在を幸福であるという者 とか、子供の成長に期待を夢みている者な

⁴³ 前掲 (註28) 資料。

⁴⁴ 拙稿「写真家・常盤とよ子が写した戦後神奈川の婦人保護事業」『横浜都市発展記念館紀要』(第16号、2020年3月)。

^{45『}性暴力問題資料集成〔編集復刻版〕』(第3巻、不二出版、2004年)所収資料。

どは見出せなかった。混血児妊婦はオンリーワンと称し、幸福な彼との世帯や渡米を夢みている者も少なくないが、出生児の母は殊に自力で、それも売春して養育している者のなかにわが子えの愛情の故に、自分の親に姿をかくして生きてる者が珍しくない。またこの母達は相手がそのうち自分のところに戻るだろうという期待を持ちつずけている者も殆んどない。[後略]

高橋の分析では、「オンリーワン」と呼ばれる、特定の占領軍兵士と関係を持つ女性たちが、出産後に困難な状況に追い込まれていることが記されている。高橋は1952年(昭和27)9月に発表した「既婚売春婦の実態調査46」において朝鮮戦争によって占領軍が朝鮮半島に移動したことにより、子どもと共に捨てられる女性の多いことも指摘しており、このような状況が施設に保護される「混血孤児」を生み出す要因であったことがわかる。また、「朝鮮事変下に於ける基地外娼の実態-基地横須賀の場合-47」では、横浜の事例として「下級街娼で中絶の費用を持っていない者-これが子供を産んでいる」と記しており、中絶費用を捻出できない最底辺の売春女性たちによる出産について言及している。

高橋が分析した女性たちの具体的な状況を知ることができる資料が、神奈川県公文書館に所蔵されている神奈川県婦人更正相談所関係資料である。同所では、送致された女性達の調書「身上調査票」を取り、各婦人更正施設への伝達の便を図っていた。調書には、氏名、生年月日、学歴、職業、現住所、本籍地、保護者氏名・住所、転落動機、妊娠有無、初交時の年齢、検挙回数・場所・状況、病歴、健康状態などが記載されている。また、調書には各婦人更生施設への送致書類が添付されており、女性たちの保護に至る

経緯が詳細に把握できる。神奈川県立公文書館では1950年(昭和25)~1955年(昭和30)の調書4冊(ハ、マ、ヤラワ、ナ行の女性238名分)を個人情報をマスキングした上で公開している。ここでは、横浜で「混血児」を出生し、聖母愛児園と思われる養護施設に預けるに至った女性の事例を3例紹介したい(伏字部分は公文書館によるマスキング部分を現わす)。

【事例1】1953年(昭和28)7月に送致された女 性の事例(本籍地:兵庫県津名郡 現住所: 横浜市南区 年齢:1926年[大正15]生27歳) 〔前略〕本人は学校を終わって○○病院看 護婦養成所に入り、卒業後病院船附として 沖縄の戦場で働き、のち樺太○○病院附と なって終戦になった。昭和二十二年引揚げ で一応本籍に落ちついたが就職のため、横 浜に来て病気となり○○に救われた。その 後、駐留米兵のオンリーワンとなり、昭和 ○○年末混血児(黒人系男児)を出産し た。翌年相手が渡鮮したので子供の委託先 に約束の養育料を送金出来なくなり、棄児 として施設に送られた模様である。本人は 今春頃からオンリーの生活圏から転落し て、覚醒剤を常用するようになり、生活に 窮してきて、それまで○○方隣家の○○方 に一軒借家していたが、家賃滞納で、所持 品を押さえられ、追放された。それで妹を ○○方に託して黄金町附近のハウスを転転 としたが、覚醒剤中毒症状があらわれるや うになってからは収入が途絶え、○○方か らは妹を戻されるということになり、六月 二十三日前途を悲観して服毒し、妹と無理 心中をはかったが未遂に終わり、妹は警察 から中央児童相談所に送致された。しかし 妹は姉をしたって児童相談所を脱出した。

⁴⁶ 同前書所収資料。

^{47『}性暴力問題資料集成〔編集復刻版〕』(第6巻、不二出版、2004年)所収資料。

七月七日再び無理心中をはかったが、その途中で悕しさに逆上したか、或はそうした幻によったものか、黄金町付近の街頭でタクシーを拾った本人は、浜松町付近の友人を訪ねたが、不在だったので挙動不審に思った運転手は寿署に同人を送致した。〔後略〕

【事例2】1953年(昭和28)9月に送致された女性の事例(本籍地:疎開先 鹿児島市 現住所:不明 年齢:1922年[大正11]生31歳)沖縄にて出生、高小卒後、紡績女工を三年ほどなし、○○と恋愛結婚し、福井県で約一ヶ年間生活した。○○は大東亜戦争に従軍戦死し、その後同人は渡満して、鉄道の事務員、旅館の女中等をしていた。

昭和二十二年来浜し、外人相手に売春し転々と旅館暮をして今日に至っているが、妊娠の月が重なってからは、客引きをして糊口をしのいでいた。八月二十九日夜客引中急に産気付き、中区〇〇方に転げ込んだので(同家は外人相手の売春ハウス)同家もその措置に困り、同人の身柄を杉下産婦人科病院に入院させ、処置を伊勢佐木警察署に願出たものであり、伊勢佐木署は同人の弟妹を探したが、妹は附近に居住し、売春婦をして居るが覚醒剤中毒者で姉を扶助する能力なく姿をかくして現れず、〔中略〕その処置を九月一日中区民生安定所に依頼してきたものである。

同所は出生児 (スパニッシュ女児)を中央 児童相談所で処置し、同人の身柄は当所に 送致されてきたものである。[後略]

【事例3】1954年(昭和29)11月に送致された女性の事例(本籍地:山梨県中巨摩郡、現住所:不明、1927年(昭和2)生26歳) 高小卒後生家で家事手伝をしていたが昭和

二十五年家出して上京し、東京都品川区大

井町で米兵相手のオンリーワンになった。 三年前横須賀に移ったが、その頃仲間の○ ○の紹介したヒロポン密売者のすゝめで少 量ながら常用者となった。そしてどうして もこの魅惑から逃れられなくなって、昨年 十月○○の情夫○○方に住込み、バタフラ イをするようになった。この家は○○夫婦 をはじめ客引も覚醒剤中毒にかかって居 り、はじめ三人いた女も逃げて、遂に本 人だけ残り、みんなの生活費と薬代に酷使 され、最近は傷をうけるような暴行に居た まらず、本月一日逃げて横須賀署に保護を 願い出た。同署から兄○○に身柄引とりを 連絡したが来ないので、六日同署から旅費 五百円を支給送環したが列車内で腎盂炎を 発作し、横浜駅で下車し、戸部警察署に保 護を願い出たものである。〔中略〕

昭和二十七年七月自宅に帰って混血児男を うんだが家人に嫌われ、出産一ヵ月後横浜 に来て、子供を養護施設に収容して貰った。 当時未命名であったといっている。

事例1の女性は、高橋の分析通り朝鮮戦争によって異動した米軍兵士に捨てられ、子どもを養育できなくなったケースである。事例2、3の女性は、高橋のいう「下級街娼で中絶の費用を持っていない者」に該当すると考えられる。事例1と3の女性は覚せい剤による中毒症状に蝕まれており、事例1の女性は何度も自殺未遂を起こすなど、極限の状況に追い込まれていたことがわかる。また、事例1の女性は従軍経験がある引揚者であり、事例2の女性は夫を戦争で亡くした戦争未亡人である。戦争の影響によって売春で生計を立てざるを得なかった女性たちが「混血児」を出産し、さらなる苦境に立たされていた事例が多く存在していたことがこれらの資料から推測できる。

第2章 記念誌・報道資料にみる 聖母愛児園の特質

大磯町のエリザベス・サンダース・ホームと 比較して、聖母愛児園の知名度が、同園の役割 に果たした役割に比して低い理由には、同園が カトリックのシスターたちによって運営された 施設であったことが関係している。同園はカト リックの世界組織、マリアの官教者フランシス コ修道会48 (Franciscan Missionaries of Mary、 以下、FMM)を母体とする社団法人大和奉仕 会(現社会福祉法人 聖母会)によって設立さ れた施設である。横浜市中区山手82番地の横 浜一般病院(THE YOKOHAMA GENERAL HOSPITAL) は、1867年(慶応3)以来の歴史 を持つ外国人専門の病院で、1935年(昭和10) からFMMが看護部門と病院の内部管理を本院 から委託されていた。戦時中の横浜における FMMは、海外から来たシスターたちが敵性国 民として抑留されたほか、山手地区一帯が外国 人立入禁止区域となり、横浜一般病院の施設が 海軍に使用されるなど、厳しい状況下に置かれ ていた。このため横浜のシスターたちは疎開先 の軽井沢で医療活動を行っていたが、戦後直後 に横浜に戻り、軍隊や住民によって荒らされて いた横浜一般病院を占領軍の支援を得て再建し て診療行為を再開したほか、空襲で家をなく した外国人の保護に努めていた。大和奉仕会 が「混血孤児」の保護に乗り出した契機につい て、FMMの記念誌では以下のように記されて いる。

11月7日、軽井沢に疎開していた横浜共同 体の全員がここへ戻ってきました。〔中略〕 それから間もなく、病院の玄関に捨てられ ていた赤ちゃんを引き取って世話したこと がきっかけで、街に捨てられていた赤ちゃ んが次々と病院へ運ばれてくるようになりました。病院の片隅に設けたベビー・ホームも直ぐに狭くなり、廊下中が籠の中に寝かされた赤ちゃんでいっぱいになりました。そのために、姉妹たちは病院側から度々お叱りを受けますが、ベビーを追い出すわけにもいかず、病院で働きながらベビーが安心して住める家を探すことになりました⁴。

この記述からは、捨子の保護を契機として「混血孤児」たちが横浜一般病院に送致されるようになり、本来想定されていなかった乳幼児の保護を同会が担うことになったことが把握できる。同会ではこのため、「県庁の補助金と教会関係者の寄付、それに米軍キャンプの協力」によって、乳児院である聖母愛児園を設立し、その後3歳以上の児童を保護するために1950年(昭和25)に児童養護施設の認可を受けたことが記念誌に記載されている。この後、FMMは1951年(昭和26)に横浜一般病院との契約を解消し、同院のシスターたちはすべて聖母愛児園に移り住み、園児の保護に傾注することになった。

横浜の「混血孤児」保護の歴史の上で聖母愛児園と深い関係のある施設が、前章で紹介した厚生省の調査結果に記載がある北海道の天使之園である。同園は聖母愛児園と同じくFMMを母体とする施設で、関東大震災における孤児救済を起源とする歴史を持つ施設であった。同会の記念誌には「混血孤児」の保護について以下のように記している。

戦災被害が比較的少なかった北海道でも、 貧困のために親から離された乳幼児が大勢 いました。その子たちは北広島天使の園に 認可されたばかりの乳児院へ収容されまし たが、混血児については、札幌市の要請で

⁴⁸ 本章におけるFMMに関する記述は、日本管区歴史編纂チーム編『日本におけるマリアの宣教者フランシスコ修道会の歴史 1898-1972』(マリアの宣教者フランシスコ修道会日本管区、2011年)を典拠とする。 49 同前書、392頁。

札幌天使院の建物の片隅に最初のベビー・ホームがつくられました。やがて、人数の増加で設備の整った建物が必要となり〔中略〕1949年(昭和24年)のクリスマスに新しいベビー・ホームが完成し、40名以上の乳幼児が新しい家に落ち着きました、子どもたちは2歳になると、北広島の天使の園へ移されました。〔中略〕

米軍キャンプの助けをかりて、横浜と東京で収容しきれなくなった子どもたちを札幌と北広島の施設へ送りました。子どもたちは札幌へ派遣されていく若い誓願者に守られて、米軍キャンプが用意した専用の貨物列車で無事札幌に到着し、北広島の施設へ移されました。貨物列車とはいえ、汽車に乗って行くことさえ非常に困難な当時としては、それは「お召し列車」と同じ位、高級なことでした。3回にわたって、子ども専用列車が札幌へ向かったと言われています50。

天使之園(現社会福祉法人 聖母会 児童養護施設 天使の園)については、山崎洋子が現地調査を実施した成果が著書に記されている⁵¹が、ここでも横浜の聖母愛児園の園児たちが天使之園に多数移送されたことが同園の関係者によって語られており、FMMが「混血孤児」保護に果たした役割は極めて大きいものであったことが把握できる。

聖母愛児園は他の児童養護施設と比べてどのような特色を持つ施設であったのか。筆者が、同園の子どもたちを養育した経験を持つシスターから伺ったところ、当時の同園で勤務していた海外のシスターたちは、極めて厳格な教義のもとで生活を送っており、夏でも厚手の長袖の修道服を乱れることなく着込み、外部の人間、

とりわけ男性との接触を避ける暮らしを送っていたという。また、当時のシスターたちの様子を記録した写真が多く残されているが、本来は写真に撮られることも禁止されていた事も伺い、外部への露出を可能な限り制限した生活を送るカトリックの教義の下で運営されていた施設であったことが想像できる。

聖母愛児園について、管見の限り初めて世間に紹介したのがニューヨーク・ポスト東京支局長のダレル・ベリガンである。ベリガンは1948年(昭和23)発行の『世界評論』誌上の記事において同園について次のように記している。

*占領の子、が最も多く集められているのはカトリックの孤児院である。この中最大のものは、*占領の子、専門に建てられた横濱のアワー・レーディー・オブ・ローデス・ホームであるがここでは訪問者は余り歓迎されない。この清浄な孤児院を万事切りまわしている口のかたい尼さんたちから多くの情報を聞くことは非常に難かしい。しかし彼女たちもすでに百三十名の赤ん坊をあずかっており、もうこれ以上あずかる余地はいまの所到底ないという位のことは教えてくれた52。

文中の「アワー・レーディー・オブ・ローデス・ホーム」(Our Lady of Lourdes Home)は聖母愛児園を指し、すでに同園が全国で最大の「混血孤児」保護施設として、メディア関係者には知られていたことが把握できる。この記事からも、容易に外部に情報を公開しない、シスターたちの毅然とした姿がうかがえる。

また、1950年(昭和25)10月11日付『読売新聞』神奈川版の記事には、横浜労働基準監督署が聖母愛児園で働く40名の求道者を労働者とみ

⁵⁰ 同前書、407~408頁。

⁵¹ 山崎前掲書、144~150頁。

⁵² ダレル・ベリガン「占領下の混血児たち」『世界評論』(第3巻10号、1948年10月)。

なし、労働基準法を適用すると通達したという 内容が記されている。記事内で同園は「戦後生 まれた混血の孤児」を保護している施設である ことが紹介され、カナダ人国籍の園長エンマ・ ルメイの下に12名のシスターと40余名の求道者 (女子のみで年少者を含む)が170名の「混血児」 を保護していることが記載されており、同園の 運営形態の特殊性を現わす資料として興味深 い。筆者はシスター各位との聞き取り調査の中 で、同園での子どもたちの保護は、見習いから 正式なシスターへ認定されるために必要な奉仕 であり、多くの子どもたちの世話は大変厳しい 仕事であったが、シスターになるために尽力し たという証言を伺った。同園では子どもたちの 養育も純粋な宗教行為とみなしていたため、労 働基準法から逸脱した就労形態が問題となった のである。記事中ではこの措置に対し、ルメイ 園長の話を以下のように掲載している。

この事業は決して私利私欲のものではなく、また求道者たちも本当に神に奉仕する気持ちでやっていることで一般の会社などの場合と違います。求道者たちのなかには混血児の母親もあり、更生しようと自ら申出て働いている者も多い、わたしどもはそういう労働を感謝して受け入れているのです。

この園長の言は、聖母愛児園の性質を端的に現わしていると考える。同園では宗教的意義を最重要視して子どもたちを保護していたため、世間に自らの活動を喧伝することが他の施設と比して少なかったことが推測できる。また、同園の昭和20年代における記録写真には、米軍支援者の撮影によるものが複数あり、教会関係者や米軍の支援が厚い同園では、国内の支援者の

寄付を必要としなかったことも、世間へのア ピールを行う必要がない要因であったと考えら れる。

しかし、本紀要第12号で紹介した1948年(昭 和23)5月6日付『婦人民主新聞』や、1949年 (昭和24) 4月号の『食生活』に同園の詳細なル ポルタージュ記事が掲載されるなど、占領期に おいて国内の人々にその存在が全く知られてい ない施設ではなかった。また、昭和20年代中ご ろから同園の姿勢にも変化が生じ、1951年(昭 和26)には、写真家、奥村泰宏と妻の常盤とよ 子が同園を頻繁に訪れて園児たちの様子を写真 に収め、同園との交流を深めていた。占領終了 後も1952年(昭和27)の『婦人倶楽部53』で同 園の紹介記事が掲載されたほか、翌年4月には 園児たちの元街小学校への入学の様子が新聞紙 上で大きく報じられた。さらに1955年(昭和 30) 3月に行われた同園の火災避難訓練の様子 がニュース映画「神奈川ニュース」で報じられ る⁵⁴など、各メディアへの露出が進むが、同園 が昭和30年代に「混血孤児」保護施設としての 役割を終えると、エリザベス・サンダース・ホー ムのようにその役割が再評価されることはな く、戦後史の影に埋もれていくことになる。

第3章 聖母愛児園所蔵資料にみる 活動概要

聖母愛児園は、運営団体である社会福祉法人 聖母会の修道会会員の減少・高齢化、および横 浜市の要請する男児の受け入れが出来ないこと などの理由から、2005年(平成17)に社会福祉 法人 キリスト教児童福祉会へ運営を移管する。 その後、2007年(平成19)より施設の改築を行い、 2010年(平成22)に現在の施設が完成する⁵⁵。 通常、このような組織改編と施設の改築が行わ

⁵³ 小山いと子「混血児地帯を行く - 悲劇の十字架を背負う二十万混血児の実態をどう考えるか - 」『婦人倶楽部』(第33巻8号、1952年8月)。

⁵⁴ 神奈川ニュース「消火避難訓練」(1955年4月20日)、本映像は当館YouTube公式チャンネルで視聴可能。

⁵⁵ 施設移管に関する記述は、社会福祉法人キリスト教児童福祉会編・発行『愛を育む 創立65周年記念誌』(2010年)を典拠とする。

れた場合、施設所蔵資料は廃棄・散逸される事例が多いが、同園では大量の資料群が保存されている。本資料群は長らく施設の倉庫に眠っていたが、聖母愛児園事務長(現施設長)の工藤則光氏が、同園の改築の際に本資料群を発見してその価値を認識したため、廃棄の危機を免れることになった。この後、同園に海外に養子に出た卒園生から自らのルーツを問いあわせる質問が届き、工藤氏がこのような質問の回答に本資料群が有用であることを見出したため、本資料群は歴史的資料ではなく、現用文書として利用されることになった。

現在でも工藤氏は定期的に届く卒園生の質問 に対し資料の情報を提供する取り組みを行って いる。同園卒園生の証言では、聖母会運営の時 期はこのような問い合わせに対応していなかっ たとのことで、工藤氏の対応は本来業務とは関 係のない、善意の行為と評価できる。筆者は横 浜に関係する社会福祉法人施設を10か所以上め ぐり、施設所蔵の占領期関係資料の調査を続け てきたが、このような活用をされている資料は 皆無であった。工藤氏からは、自らの出生や母 親についての問い合わせの他に、養子に出たの ちも困難な状況下にある卒園生から問い合わせ が来ることを伺った。このことは、「混血孤児」 問題が現在進行形の社会問題であることを現わ していると共に、同園が本問題に対し戦後と同 様に大きな役割を果たしていることを示してい る。

同園資料群は、入園児童の名簿や来歴に関する資料、養子縁組に関する資料、昭和20年代の写真資料の3つに大別することができる。このうち、同園の保護児童の概要を総合的に把握できる資料が「児童動静簿1」である。本資料は1946年(昭和21)から1963年(昭和38)までに同園に入所した園児の名簿であり、入所番号、姓名、霊名、生年月日、性別、入所年月日、受洗年月日、父の国籍、入所理由、退所年月日、退所理由が記載されている。本資料の情報のう

ち、占領期の1946年(昭和21)から1952年(昭和27)に入園した園児の主要情報をまとめたのが【表】である。

【表】では、1946年(昭和21)4月に入所した 児童の記録と6月に入所した3名の捨子の記録が 記されているが、これは第1章でのアロイジオ の発言にある児童の記録と考えられる。3名の うちの1名が「混血孤児」であったが、同年10 月までの記録では、日本人の入所児童の方が多 く、施設開設当初は「混血孤児」専門の施設で はなかったことが推測できる。しかし、同年11 月以降は外国籍の父親によって生まれた児童の 数が急激に増え、「混血孤児」保護施設として の同園の特色が鮮明になってゆくことが把握で きる。

本資料記載の父の国籍欄情報は、捨子の場合は肌の色などで判別していると考えられるため、正しい国籍を反映しているとは限らないが、占領軍兵士を現わすと考えられるアメリカ国籍の父から生まれた子どもの数を年別にみると、1946年(昭和21)19名、1947年(昭和22)99名、1948年(昭和23)63名、1949年(昭和24)40名、1950年(昭和25)23名、1951年(昭和26)20名、1952年(昭和27)19名と、1947年(昭和22)をピークとして、1950年(昭和25)以降は20名前後が継続して入所していることがわかる。

敗戦直後から次第に入所児童が減少する要因として、1949年(昭和24)4月号の『食生活』記事、「天使と遊ぶ孤児たちー横浜聖母愛児園を訪うー」において、記者に対しアロイジオは女性たちが「妊娠を中断する方法」を学んだために、入所児童が少なくなったという推測を語っている。避妊をしない占領軍兵士の無責任な姿勢や、女性たちが中絶手術を受けられない戦後混乱期の状況が、本資料の数値に現れているといえよう。

【表】で注目できるのが、退所理由欄に記載されている入園児の死亡を示す「†(十字架のマーク)」の多さである。496名の保護児童の

内128名が死亡しており、26%もの児童が亡くなっていることがわかる。年別の死亡児童数は、1946年(昭和21)15名、1947年(昭和22)55名、1948年(昭和23)33名、1949年(昭和24)9名、1950年(昭和25)7名、1951年(昭和26)2名、1952年(昭和27)3名と、こちらも1947年(昭和22)をピークとして減少が続く。

同園所蔵資料には、亡くなった園児の情報を 記載した「死亡台帳」があり、【表】の病名欄 と埋葬地欄は本資料の情報を記載している。病 名欄を見ると、早産児が最も多く38名おり、急 性肺炎19名、先天性梅毒18名がこれに続く。早 産児の多いことは『食生活』でのアロイジロの インタビューでも語られており、「生活の悪い のと母体の栄養が悪い | ことが推測要因として 挙げられている。また、先天性梅毒による死者 の多さにも注目でき、第1章で紹介したような 極限状況に追い込まれた女性たちによって、多 くの子どもたちが出生し、命を失ったことが推 測できる。同園では医療知識を持つシスターに よって懸命な乳幼児の治療が行われていたが、 なおこれだけの児童が死亡したことは、本問題 が日本戦後史上に残る悲劇であったことを示し ているといえよう。

「死亡台帳」には、死亡した園児たちの埋葬場所も明記されているが、【表】では戸塚区聖母の園に92名、中区善行寺に23名が埋葬されたことが把握できる。聖母の園は1937年(昭和12)よりFMMが開設した修練院をルーツとし、戦時期は施設が海軍に接収され衛生学校として使用され、戦後は占領軍に接収されていたが、1946年(昭和21)に返還される。その後、戦災を受けた高齢者をはじめとした戦争被害者保護施設を開設し、現在も高齢者介護相互センター聖母の園として社会福祉法人聖母会が運営を継続している。このような経緯を持つ聖母の園に聖母愛児園の園児たちが埋葬されたことは自然であるが、中区善行寺に23名もの園児が埋葬された理由については、現在までの調査では明

らかにすることはできなかった。本件について は、継続して調査したいと考える。

【表】の退所理由をみると、1946年(昭和21)~1950年(昭和25)頃までは「他の施設」に移動した園児が多くみられる。これには、第2章で述べた北広島の天使の園に移送された園児が多く含まれると考えられる。養子に出る園児は占領が終わる1952年(昭和27)頃から急増しており、難民救済法成立以前から養子縁組が積極的に行われていたことを示す。これは、国外ではなく国内の在住の外国人家族との養子縁組であると考えられる。1954年(昭和29)からは先述の通り、海外への養子縁組が積極的に行われることになる。

また、現在筆者が把握している国内に残る同園卒園生はすべて少年の町卒園の男性のみで、女性の卒園生について知る関係者は皆無であった。その理由について、筆者が聞き取りをした複数の卒園者は「女子はみな養子になって海外へ行った」とういう趣旨の証言をしている。【表】では、男子は少年の町を示す「ボーイズターン」表記の園児が25名存在するが、女子は73名が養女・養子となっている。他の園児も親に引き取られたり、他の施設に移動しており、就職をして退園したり、入所期限である18歳まで同園に在籍していた園児は見当たらない。このことから、性別が園児の進路にある程度関連する要素であったことが推測できる。

【表】に記載していない1953年(昭和28)以降の情報では、アメリカ国籍の父を持つ園児が、1958年(昭和33)を境として減少することに注目できる。1960年(昭和35)10月に入園した園児を最後に日本国籍を持つ父の子のみが入園するようになり、翌年3月からは国籍欄への記載自体がなくなるため、この時期に同園が「混血孤児」保護施設としての役割を終えたことがうかがえる。講和条約締結後、漸進的に市内の接収が解除され、1955年(昭和30)以降は横浜市内にあった米軍の諸施設が、座間町(現座間市)、

相模原市などの米軍施設内に集約・移転された ことにより、市内の米軍兵士数は激減する。こ のことが、同園の記録に反映されていると考え られる。

「混血孤児」保護施設としての役割を終えた 後も、同園は女子専門の児童養護施設として運 営を続け、運営母体が変わった現在も養護を必 要とする男女児童のための児童養護施設として 大きな役割を果たしている。同園の歴史は、市 内の児童養護の歴史が戦争孤児と共に「混血孤 児」の保護を契機として発展したことを物語っ ているといえよう。

おわりに

中央福祉審議会記録などの公的資料からは、 戦後占領期における「混血児」問題の中心に神 奈川県があり、特に「混血孤児」問題に関しては、 聖母愛児園とエリザベス・サンダース・ホーム がその保護に大きな役割を果たしていたことが 具体的に明らかとなった。聖母愛児園では、敬 虔なカトリックのシスターたちによって、宗教 的教育が園児たちになされ、その将来について も、国の指針が示されない段階から心を砕いて いたことが推測できる。また、同園所蔵資料か らは、市内の「混血孤児」の概要に加え、過酷 な状況下に生まれ、多くの子どもたちが犠牲に なった状況が明らかとなった。

しかし、本稿では横浜の「混血孤児」問題における概要の一端を述べたに過ぎない。同園所蔵資料には、【表】に記載された園児たちがどのような境遇で出生し、保護されるに至ったのかを知る資料が多数残されている。また、筆者が現在までに行った卒園生の聞き取り調査によって、社会に出たのちも様々な困難と闘うことを余儀なくされた経験を持つ方が多く存在することを把握している。本問題は、すでに解決した歴史上の悲劇ではなく、現在進行形の社会問題であることは疑いようのない事実である。今後は個々の事例に焦点を当て、本問題の深層

に迫っていきたいと考える。

本稿の執筆にあたり、聖母愛児園、ファチマの聖母少年の町卒園生・関係者の皆様、および社会福祉法人 キリスト教児童福祉会 聖母愛児園施設長の工藤則光氏に多大なご協力を賜りました。末尾ながら厚くお礼申し上げます。

【表】聖母愛児園入園児童動静一覧(1946年〔昭和21〕~1952年〔昭和27〕)

										1		
入所番号	生年	月	性別	入所年	月	国籍(父の)	入所理由	退所年	月	退所理由	病名	埋葬地
1	昭和20年		男	昭和21年	2月	日本人	棄子	昭和21年	3月	養子		
2	昭和21年	3月	女	昭和21年	4月	日本人	引渡	昭和22年	7月	他の施設		
3	昭和21年	6月	女	昭和21年	6月	米国人	棄子	昭和21年	8月	+	早産児	中区善行寺
4	昭和19年	2月	女	昭和21年	6月	日本人らしい	棄子	昭和23年	3月	他の施設		
5	昭和21年	4月	男	昭和21年	6月	日本人	棄子	昭和22年	12月	他の施設		
6	昭和15年	5月	女	昭和21年	7月	日本人	浮浪児	昭和21年	8月	他の施設		
7	昭和21年	2月	女	昭和21年	7月	日本人	棄子	昭和22年	7月	他の施設		
8	昭和21年	6月	男	昭和21年	7月	イタリヤ人	引渡	昭和30年	7月	養子		
9	昭和20年	12月	女	昭和21年	7月	フィリピン人	引渡	昭和22年	7月	他の施設		
10	昭和21年	7月	女	昭和21年	8月	日本人	棄子	昭和24年	1月	養子		
11	昭和20年	8月	女	昭和21年	8月	日本人	棄子	昭和21年	8月	引取		
12	昭和19年	2月	女	昭和21年	8月	日本人	預り	昭和22年	3月	他の施設		
13	昭和11年		男	昭和21年	8月	日本人	迷子	昭和21年	9月	実母引取		
14	昭和20年	2月	男	昭和21年	8月	日本人	預り	昭和25年	7月	他の施設		
15	昭和21年	8月	女	昭和21年	8月	日本人	引渡	昭和21年	12月	養女		
												横浜市共同墓
16	昭和21年	8月	女	昭和21年	8月	アメリカ人	棄子	昭和21年	9月	†	早産児	地 (未入籍)
17	昭和21年	8月	男	昭和21年	9月	日本人	引渡	昭和21年	10月	†	先天性梅毒、 奇形児	中区善行寺
18	昭和21年	9月	男	昭和21年	10月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和30年	3月	ボーイズターン		
19	昭和21年	9月	男	昭和21年	10月	日本人	棄子	昭和23年	7月	他の施設		
20	昭和21年	9月	女	昭和21年	10月	日本人	預り	昭和23年	10月	実母引取		
21	昭和21年	4月	男	昭和21年	9月	日本人	棄子	昭和23年	4月	養子		
22	昭和21年	7月	女	昭和21年	8月	日本人	棄子	昭和23年	3月	他の施設		
23	昭和21年	2月	女	昭和21年	10月	日本人	引渡	昭和22年	7月	他の施設		
24	昭和21年	9月	女	昭和21年	10月	日本人	棄子	昭和23年	3月	他の施設		
25	昭和21年	10月	男	昭和21年	10月	アメリカ人	棄子	昭和26年	6月	養子		
26	昭和15年	10月	女	昭和21年	10月	日本人	引渡	昭和21年	10月	他の施設		
27	昭和21年	8月	男	昭和21年	10月	日本人	預り	昭和21年	11月	†	脳膜炎	中区善行寺
28	昭和21年	10月	男	昭和21年	10月	アメリカ兵	棄子	昭和23年	1月	養子		
29	昭和21年	10月	男	昭和21年	10月	日本人	預り	昭和22年	12月	他の施設		
30	昭和21年	10月	男	昭和21年	10月	アメリカ	棄子	昭和30年	1月	養子		
31	昭和20年	6月	女	昭和21年	10月	日本	預り	昭和22年	6月	†	腸結核	戸塚区聖母の園
32	昭和21年	4月	女	昭和21年	10月	グ日本 母フランス	預り	昭和22年	10月	実母引取		, ,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
33	昭和21年	11月	女	昭和21年	11月		棄子	昭和23年	3月	他の施設		
34	昭和21年	9月	男	昭和21年	11月	アメリカ	引渡	昭和21年	11月	†	急性肺炎	中区善行寺
35	昭和21年	11月	女	昭和21年	11月	アメリカ	棄子	昭和21年	12月	†	早産児	保土ヶ谷区信 者墓地
36	昭和21年	9月	女	昭和21年	11月	日本人	棄子	昭和21年	12月	+	悪性中耳炎	中区善行寺
37	昭和21年	10月	男	昭和21年	11月	アメリカ	引渡	昭和30年	3月	ボーイズターン		
38	昭和21年	10月	女	昭和21年	11月	アメリカ	引渡	昭和22年	1月	+	悪性脳膜炎	中区善行寺
39	昭和21年	10月	男	昭和21年	11月	アメリカ	捨子	昭和21年	12月	†	急性肺炎	中区善行寺
40	昭和21年	11月	女	昭和21年	11月	日本	引渡	昭和22年	2月	†	急性脳膜炎	中区善行寺
41	昭和21年	11月	男	昭和21年		アメリカ(黒人)	引渡	昭和22年	3月	+	急性脳膜炎	戸塚区聖母の園
42	昭和21年	8月	男	昭和21年	11月	日本	引渡	昭和22年	12月	他の施設		
43	昭和21年	11月	男	昭和21年	12月	アメリカ	引渡	昭和25年	7月	養子		
10	-H-1H21-F	11/1		-H-1H21-F	10/1	, , , , , ,	J 1 1 1 X	-11111111111111111111111111111111111111	• / 3	12.1	I	1

			1									
入所番号	生年	月	性別	入所年	月	国籍(父の)	入所理由	退所年	月	退所理由	病名	埋葬地
44	昭和21年	11月	男	昭和21年	12月	アメリカ	引渡	昭和21年	12月	†	急性肺炎	南区上大岡町
45	昭和21年	11月	女	昭和21年	12月	アメリカ	捨子	昭和21年	12月	†	早産児	中区善行寺
46	昭和21年	11月	男	昭和21年	12月	アメリカ	捨子	昭和26年	1月	養子		
47	昭和19年	3月	女	昭和21年	12月	日本	引渡	昭和22年	3月	他の施設		
48	昭和21年	12月	女	昭和21年	12月	アメリカ	引渡	昭和22年	2月	†	全身水腫	戸塚区聖母の園
49	昭和21年	10月	女	昭和21年	11月	父日本 母ジャワ	預り	昭和22年	12月	実母引取		
50	昭和21年	8月	男	昭和21年	9月	アメリカ	預り	昭和21年	9月	実母引取		
51	昭和21年	12月	男	昭和21年	12月	アメリカ	捨子	昭和30年	1月	養子		
52	昭和21年	12月	女	昭和22年	1月	アメリカ	引渡	昭和22年	2月	†	早産児	戸塚区聖母の園
53	昭和22年	1月	男	昭和22年	1月	アメリカ	引渡	昭和22年	2月	†	早産児	中区善行寺
54	昭和21年	11月	男	昭和22年	1月	アメリカ	引渡	昭和22年	1月	†	記載	なし
55	昭和22年	1月	女	昭和22年	1月	日本人	引渡	昭和23年	3月	他の施設		
56	昭和21年	12月	男	昭和22年	1月	アメリカ	引渡	昭和22年	2月	+	先天性結核	中区善行寺
57	昭和21年	3月	女	昭和22年	1月	日本人	預り	昭和22年	3月	†	腸結核	実父引取る
58	昭和21年	12月	女	昭和22年	2月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和22年	2月	†	全身瘍痒	中区善行寺
59	昭和21年	12月	男	昭和22年	2月	アメリカ	引渡	昭和22年	2月	+	ヘルニア	中区善行寺
60	昭和22年	1月	女	昭和22年	2月	アメリカ	引渡	昭和25年	5月	他の施設	-//	1 2 2 11 4
61	昭和22年	1月	男	昭和22年	2月	アメリカ	引渡	昭和22年	4月	†	急性脳膜炎	中区善行寺
		2月					引渡			養女	芯住個族火	中区普行子
62	昭和22年		女田田	昭和22年	2月	アメリカ(黒人)		昭和31年	10月			
63	昭和21年	12月	男	昭和22年	2月	日本	引渡	昭和24年	1月	他の施設		
64	昭和22年	2月	女	昭和22年	2月	アメリカ	引渡	昭和25年	5月	他の施設	11	-1000000000
65	昭和21年	12月	男	昭和22年	3月	アメリカ	引渡	昭和22年	4月	+	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
66	昭和22年	3月	男	昭和22年	3月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和22年	3月	+	早産児	戸塚区聖母の園
67	昭和22年	1月	女	昭和22年	3月	アメリカ	捨子	昭和24年	1月	養女		
68	昭和21年	12月	男	昭和22年	3月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和31年	11月	養子		
69	昭和22年	3月	男	昭和22年	3月	アメリカ	引渡	昭和22年	5月	t	早産児	戸塚区聖母の園
70	昭和22年	4月	女	昭和22年	4月	日本人らしい	捨子	昭和30年	4月	養女		
71	昭和21年	9月	男	昭和22年	4月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和30年	3月	ボーイズターン		
72	昭和22年	3月	男	昭和22年	4月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和31年	9月	養子		
73	昭和22年	2月	男	昭和22年	4月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和31年	12月	養子		
74	昭和22年	4月	女	昭和22年	4月	アメリカ	預り	昭和25年	8月	実母引取		
75	昭和22年	4月	女	昭和22年	4月	日本	引渡	昭和22年	8月	†	急性肺炎	戸塚区聖母の園
76	昭和22年	2月	男	昭和22年	4月	アメリカ	引渡	昭和30年	1月	養子		
77	昭和22年	2月	男	昭和22年	4月	アメリカ	預り	昭和23年	12月	実母引取		
78	昭和22年	4月	女	昭和22年	4月	日本人らしい	捨子	昭和23年	9月	他の施設		
79	昭和22年	3月	男	昭和22年	4月	日本人らしい	捨子	昭和23年	7月	他の施設		
80	昭和22年	3月	男	昭和22年	4月	日本人	預り	昭和23年	5月	実母引取		
81	昭和20年	5月	女	昭和22年	4月	日本人	預り	昭和22年	7月	他の施設		
82	昭和22年	4月	男	昭和22年	4月	アメリカ	引渡	昭和22年	7月	†	急性脳膜炎	中区善行寺
83	昭和22年	3月	男	昭和22年	4月	アメリカ	捨子	昭和28年	6月	養子		
84	昭和22年	2月	男	昭和22年	4月	日本	引渡	昭和30年	2月	他の施設		
85	昭和22年	2月	男	昭和22年	4月	日本	預り	昭和22年	7月	十	急性肺炎	中区善行寺
	昭和22年					日本				養子	心压仰火	
86		4月	女田	昭和22年	5月		引渡	昭和33年	7月			
87	昭和22年	1月	男	昭和22年	5月	アメリカ	引渡	昭和23年	3月	養子		
88	昭和21年		女	昭和22年	5月	父日本 母オランダ	預り	昭和22年	7月	実母引取		

入所番号	生年	月	性別	入所年	月	国籍(父の)	入所理由	退所年	月	退所理由	病名	埋葬地
89	昭和21年	8月	男	昭和22年	5月	日本	預り	昭和23年	5月	実母引取		
90	昭和22年	5月	男	昭和22年	5月	日本	引渡	昭和22年	11月	+	先天性梅毒	中区善行寺
91	昭和22年	5月	男	昭和22年	5月	アメリカ	引渡	昭和30年	4月	養子		
92	昭和21年	12月	女	昭和22年	6月	アメリカ	引渡	昭和24年	3月	他の施設		
93	昭和21年	12月	女	昭和22年	6月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和22年	8月	†	消化不良	中区善行寺
94	昭和21年	11月	女	昭和22年	6月	父中国 母日本	引渡	昭和23年	3月	他の施設		
95	昭和22年	4月	男	昭和22年	6月	日本	引渡	昭和24年	1月	他の施設		
96	昭和22年	5月	男	昭和22年	6月	アメリカ	引渡	昭和30年	3月	ボーイズターン		
97	昭和22年	4月	男	昭和22年	6月	アメリカ	引渡	昭和22年	7月	†		戸塚区聖母の園
98	昭和22年	5月	女	昭和22年	6月	日本	引渡	昭和23年	9月	他の施設) - 从巴里耳•0日
99	昭和22年	6月	男	昭和22年	6月	アメリカ	引渡	昭和30年	3月	養子		
100	昭和22年	3月	女	昭和22年	6月	アメリカ	引渡	昭和31年	7月	養子		
101	昭和22年	5月	女	昭和22年	6月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和22年	7月	†		戸塚区聖母の園
101	昭和22年	6月	女	昭和22年	6月	アメリカ	引渡	昭和26年	12月	他の施設		户冰区主身の困
102		6月	男		6月	日本	引渡		6月	十	早産児	中区善行寺
103	昭和22年 昭和22年	5月	男男	昭和22年 昭和22年	6月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和22年	7月	†	急性肺炎	戸塚区聖母の園
								昭和22年		†		
105	昭和22年	5月	女	昭和22年	6月	アメリカ(黒人)	捨子	昭和22年	6月	†	先天性梅毒	中区善行寺
106	昭和21年	12月	女	昭和22年	6月	日本人	引渡	昭和22年	7月		急性脳膜炎	戸塚区聖母の園
107	昭和21年	12月	女	昭和22年	6月	アメリカ	引渡	昭和22年	6月	養女		
108	昭和22年	4月	男	昭和22年	6月	アメリカ	引渡	昭和22年	7月	+		戸塚区聖母の園
109	昭和21年	10月	男	昭和22年	6月	アメリカ	引渡	昭和25年	10月	養子		
110	昭和22年	5月	男	昭和22年	6月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和30年	3月	ボーイズターン		
111	昭和22年	4月	男	昭和22年	6月	アメリカ	引渡	昭和22年	7月	†	脳膜炎	戸塚区聖母の園
112	昭和22年	2月	男	昭和22年	7月	アメリカ(黒人)	捨子	昭和29年	11月	養子		
113	昭和22年	6月	男	昭和22年	7月	アメリカ	引渡	昭和30年	3月	ボーイズターン		
114	昭和22年	6月	男	昭和22年	7月	アメリカ	引渡	昭和22年	7月	†	早産児	中区善行寺未入籍児
115	昭和22年	2月	女	昭和22年	7月	アメリカ	引渡	昭和22年	7月	†	消化不良	戸塚区聖母の園
116	昭和22年	6月	男	昭和22年	7月	アメリカ	引渡	昭和22年	7月	†	早産児	戸塚区聖母の園
117	昭和21年	9月	男	昭和22年	7月	アメリカ	引渡	昭和28年	7月	養子		
118	昭和22年	6月	女	昭和22年	7月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和22年	11月	†	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
119	昭和22年	7月	女	昭和22年	7月	アメリカ	引渡	昭和25年	10月	養子		
120	昭和22年	6月	女	昭和22年	7月	アメリカ	預り	昭和24年	1月	実母引取		
121	昭和22年	7月	女	昭和22年	7月	アメリカ	引渡	昭和31年	7月	養女		
122	昭和22年	7月	女	昭和22年	7月	日本	引渡	昭和24年	5月	他の施設		
123	昭和22年	7月	女	昭和22年	7月	アメリカ	引渡	昭和22年	9月	†	早産児	戸塚区聖母の園 未入籍児
124	昭和21年	11月	男	昭和22年	7月	日本	預り	昭和22年	9月	実母引取		
125	昭和22年	7月	男	昭和22年	7月	アメリカ	引渡	昭和28年	11月	†	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
126	昭和22年	7月	女	昭和22年	7月	イタリア	預り	昭和22年	3月	実母引取		
127	昭和22年	6月	女	昭和22年	7月	日本	引渡	昭和24年	8月	+	急性肺炎	戸塚区聖母の園
128	昭和22年	7月	男	昭和22年	7月	日本	捨子	昭和25年	4月	他の施設		
129	昭和22年	7月	男	昭和22年	7月	父朝鮮 母日本	引渡	昭和25年	5月	他の施設		
130	昭和22年	6月	女	昭和22年	7月	日本	捨子	昭和22年	8月	実母引取		
131	昭和22年	6月	男	昭和22年	8月	アメリカ	引渡	昭和22年	9月	†	急性肺炎	戸塚区聖母の園

入所番号	生年	月	性別	入所年	月	国籍(父の)	入所理由	退所年	月	退所理由	病名	埋葬地
132	昭和22年	7月	男	昭和22年	8月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和22年	8月	†	早産児	戸塚区聖母の園 未入籍児
133	昭和22年	7月	女	昭和22年	8月	日本	捨子	昭和22年	8月	+		中区善行寺
134	昭和22年	8月	女	昭和22年	8月	アメリカ	引渡	昭和22年	11月	+	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
135	昭和22年	7月	女	昭和22年	8月	アメリカ(黒人)	預り	昭和23年		実母引取		
136	昭和22年	7月	女	昭和22年	8月	日本	捨子	昭和24年	5月	他の施設		
137	昭和22年	7月	女	昭和22年	8月	日本	引渡	昭和22年	8月	+	消化不良	戸塚区聖母の園
138	昭和22年	8月	女	昭和22年	8月	アメリカ	引渡	昭和22年	8月	+	早産児	戸塚区聖母の園
139	昭和22年	7月	男	昭和22年	8月	アメリカ	引渡	昭和30年	3月	ボーイズターン		
140	昭和22年	7月	男	昭和22年	8月	アメリカ	引渡	昭和26年	1月	養子		
141	昭和22年	1月	男	昭和22年	8月	日本	引渡	昭和23年	6月	他の施設		
142	昭和22年	7月	女	昭和22年	8月	アメリカ	引渡	昭和23年	1月	+	急性脳膜炎	戸塚区聖母の園
143	昭和22年	8月	女	昭和22年	8月	アメリカ	引渡	昭和24年	8月	養女		
144	昭和22年	8月	男	昭和22年	9月	アメリカ	引渡	昭和28年	10月	養子		
145	昭和22年	7月	男	昭和22年	9月	日本	引渡	昭和25年	3月	他の施設		
146	昭和22年	7月	男	昭和22年	9月	日本	引渡	昭和22年	12月	†	急性肺炎	中区善行寺
147	昭和22年	8月	女	昭和22年	9月	日本	引渡	昭和24年	5月	他の施設		
148	昭和22年	8月	男	昭和22年	9月	アメリカ	引渡	昭和22年	9月	†	早産児	戸塚区聖母の園 未入籍児
149	昭和22年	8月	男	昭和22年	9月	アメリカ	引渡	昭和30年	3月	ボーイズターン		
150	昭和22年	7月	男	昭和22年	9月	アメリカ	引渡	昭和29年	4月	養子		
151	昭和22年	8月	男	昭和22年	9月	アメリカ	引渡	昭和27年	6月	養子		
152	昭和22年	9月	男	昭和22年	9月	アメリカ	引渡	昭和23年	2月	養子		
153	昭和22年	9月	男	昭和22年	9月	日本	引渡	昭和22年	9月	+	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
154	昭和22年	9月	女	昭和22年	9月	アメリカ	引渡	昭和22年	9月	†	早産児 (双胎児)	戸塚区聖母の園
155	昭和22年	9月	女	昭和22年	9月	アメリカ	引渡	昭和22年	11月	+	早産児	戸塚区聖母の園
156	昭和22年	9月	女	昭和22年	9月	アメリカ	引渡	昭和22年	10月	†	早産児 (双胎児)	戸塚区聖母の園
157	昭和22年	2月	女	昭和22年	9月	日本	預り	昭和22年	10月	†	潰瘍性腸炎	戸塚区聖母の園
158	昭和22年	9月	女	昭和22年	9月	アメリカ	引渡	昭和27年	3月	養子		
159	昭和22年	8月	男	昭和22年	9月	アメリカ	引渡	昭和22年	10月	†	急性肺炎	戸塚区聖母の園
160	昭和22年	9月	女	昭和22年	9月	アメリカ	引渡	昭和22年	10月	†	早産児	戸塚区聖母の園
161	昭和22年	8月	男	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和28年	9月	養子		
162	昭和22年	9月	男	昭和22年	10月	日本	捨子	昭和25年	3月	他の施設		
163	昭和22年	9月	女	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和27年	9月	他の施設		
164	昭和22年	10月	男	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和28年	10月	養子		
165	昭和22年	9月	男	昭和22年	10月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和22年	11月	†	早産児	戸塚区聖母の園 未入籍
166	昭和22年	10月	女	昭和22年	10月	日本	引渡	昭和24年	5月	他の施設		
167	昭和22年	8月	男	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和30年	3月	ボーイズターン		
168	昭和22年	10月	女	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和22年	10月	+	早産児	戸塚区聖母の園
169	昭和21年	10月	男	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和27年	4月	養子		
170	昭和22年	9月	女	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和26年	5月	他の施設		
171	昭和22年	2月	男	昭和22年	10月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和30年	3月	ボーイズターン		
172	昭和22年	9月	女	昭和22年	10月	日本らしい	捨子	昭和23年	2月	t	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
173	昭和22年	3月	女	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和22年	10月	実母引取		
174	昭和22年	9月	女	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和26年	5月	他の施設		

入所番号	生年	月	性別	入所年	月	国籍(父の)	入所理由	退所年	月	退所理由	病名	埋葬地
175	昭和22年	4月	男	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和30年	1月	養子	77.7	
176	昭和22年	7月	女	昭和22年	10月	日本らしい	捨子	昭和24年	5月	†	先天性梅毒	中区善行寺
177	昭和22年	9月	女	昭和22年	10月	日本	引渡	昭和24年	5月	他の施設	767 (12144	1 1 11 4
178	昭和22年	6月	男	昭和22年	10月	日本	引渡	昭和25年	9月	他の施設		
179	昭和22年	10月	女	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和30年	1月	養女		
180	昭和22年	10月	男	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和30年	9月	養子		
181	昭和22年	5月	男	昭和22年	10月	アメリカ	引渡	昭和29年	1月	養子		
182	昭和20年	6月	女	昭和20年	10月	日本	預り	昭和27年	2月	実父引取		
183	昭和22年	10月	男	昭和22年	11月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和31年	12月	養子		
184	昭和22年	7月	女	昭和22年	11月	日本(ハワイ二世)	引渡	昭和24年	5月	他の施設		
185	昭和22年	10月	女	昭和22年	11月	日本	引渡	昭和24年	5月	他の施設		
	昭和21年		男			日本	預り			実母引取		
186		10月	95	昭和22年	11月	口华	頂り	昭和25年	10月			
187	昭和22年	11月	男	昭和22年	11月	日本	預り	昭和24年	12月	父方伯母 引取		
188	昭和22年	11月	女	昭和22年	11月	アメリカ	引渡	昭和28年	2月	養女		
189	昭和22年	11月	女	昭和22年	11月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和23年	1月	t	消化不良	戸塚区聖母の園
190	昭和22年	11月	男	昭和22年	11月	アメリカ	引渡	昭和30年	12月	養子		
191	昭和21年	11月	男	昭和22年	11月	アメリカ	引渡	昭和23年	3月	養子		
192	昭和22年	9月	女	昭和22年	11月	アメリカ	引渡	昭和29年	4月	養女		
193	昭和22年	10月	男	昭和22年	12月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和24年	4月	他の施設		
194	昭和19年	12月	男	昭和22年	12月	日本	引渡	昭和23年	5月	実父引取		
195	昭和22年	8月	男	昭和22年	12月	アメリカ	預り	昭和30年	3月	養子		
196	昭和22年	11月	男	昭和22年	12月	日本	引渡	昭和23年	12月	†	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
197	昭和22年	9月	男	昭和22年	12月	父朝鮮 母日本	引渡	昭和25年	4月	他の施設		
198	昭和22年	12月	女	昭和22年	12月	アメリカ	引渡	昭和30年	1月	養女		
199	昭和22年	7月	女	昭和22年	12月	日本	引渡	昭和23年	1月	+	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
200	昭和22年	12月	男	昭和22年	12月	アメリカ	引渡	昭和30年	3月	養子		
201	昭和22年	12月	女	昭和22年	12月	日本	引渡	昭和23年	1月	†	早産児	戸塚区聖母の園
202	昭和22年	8月	男	昭和22年	12月	日本	引渡	昭和23年	3月	実父母引取		
203	昭和22年	12月	男	昭和22年	12月	日本人らしい	捨子	昭和25年	4月	他の施設		
204	昭和22年	8月	女	昭和23年	1月	アメリカ	引渡	昭和30年	3月	養女		
205	昭和22年	1月	女	昭和23年	1月	日本	引渡	昭和23年	9月	他の施設		
206	昭和22年	12月	男	昭和23年	1月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和23年	8月	†	急性肺炎	戸塚区聖母の園
207	昭和22年	1月	女	昭和23年	1月	アメリカ	引渡	昭和29年	7月	養女		
208	昭和22年	12月	男	昭和23年	1月	日本	引渡	昭和23年	1月	†	急性脳膜炎	戸塚区聖母の園
209	昭和22年	12月	女	昭和22年	12月	日本らしい	捨子	昭和24年	5月	他の施設		
210	昭和22年	12月	男	昭和22年	12月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和30年	3月	ボーイズターン		
211	昭和22年	9月	女	昭和22年	12月	日本	引渡	昭和24年	4月	他の施設		
212	昭和22年	12月	女	昭和23年	1月	父ポーランド 母日本	引渡	昭和23年	1月	t	消化不良	戸塚区聖母の園
213	昭和22年	11月	女	昭和23年	1月	日本らしい	捨子	昭和24年	5月	他の施設		
214	昭和22年	1月	男	昭和23年	1月	日本	預り	昭和23年	1月	実父引取		
215	昭和22年	3月	男	昭和23年	1月	日本	預り	昭和24年	12月	実父引取		
216	昭和22年	8月	女	昭和23年	1月	日本	引渡	昭和23年	2月	†	急性脳膜炎	戸塚区聖母の園
217	昭和23年	1月	女	昭和23年	1月	日本	引渡	昭和24年	7月	他の施設		
218	昭和22年	1月	男	昭和23年	1月	アメリカ	引渡	昭和26年	6月	養子		

入所番号	生年	月	性別	入所年	月	国籍(父の)	入所理由	退所年	月	退所理由	病名	埋葬地
219	昭和23年	1月	女	昭和23年	1月	アメリカ	引渡	昭和26年	5月	他の施設		
220	昭和23年	1月	女	昭和23年	1月	アメリカ	引渡	昭和23年	4月	†	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
221	昭和22年	9月	女	昭和23年	1月	アメリカ	引渡	昭和24年	1月	養女		
222	昭和23年	1月	女	昭和23年	1月	日本(二世)	引渡	昭和23年	3月	†	早産児	戸塚区聖母の園
223	昭和23年	1月	女	昭和23年	1月	アメリカ	引渡	昭和26年	5月	他の施設		
224	昭和23年	1月	男	昭和23年	1月	日本(二世)	引渡	昭和25年	5月	他の施設		
225	昭和22年	11月	男	昭和23年	1月	父日本 母オランダ	引渡	昭和31年	2月	養子		
226	昭和22年	12月	女	昭和23年	1月	アメリカ	引渡	昭和30年	3月	養女		
227	昭和23年	1月	男	昭和23年	1月	日本(二世)	引渡	昭和25年	9月	+	記載	戏なし
228	昭和22年	7月	女	昭和23年	2月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和36年	7月	ドイツへ 養子		
229	昭和23年	2月	男	昭和23年	2月	アメリカ	引渡	昭和27年	7月	養子		
230	昭和23年	1月	女	昭和23年	2月	日本	引渡	昭和24年	11月	他の施設		
231	昭和23年	2月	女	昭和23年	2月	日本らしい	捨子	昭和23年	3月	†	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
232	昭和23年	1月	女	昭和23年	2月	日本	引渡	昭和23年	3月	+	ヘルニア	戸塚区聖母の園
233	昭和23年	1月	女	昭和23年	2月	アメリカ	引渡	昭和28年	7月	養女		
234	昭和23年	1月	男	昭和23年	2月	日本人らしい	捨子	昭和23年	3月	+	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
235	昭和23年	2月	男	昭和23年	2月	アメリカ	引渡	昭和23年	4月	+	早産児	戸塚区聖母の園
236	昭和23年	2月	男	昭和23年	2月	アメリカ	引渡	昭和31年	8月	養子	, ,, _	
237	昭和22年	12月	女	昭和23年	2月	日本	引渡	昭和24年	11月	他の施設		
238	昭和22年	11月	女	昭和23年	2月	父、母朝鮮	引渡	昭和23年	3月	†	急性肺炎	戸塚区聖母の園
239	昭和23年	2月	女	昭和23年	2月	アメリカ	引渡	昭和25年	9月	養女	-a-immy	, ,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
240	昭和23年	2月	男	昭和23年	3月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和23年	3月	†	早産児	戸塚区聖母の園
241	昭和23年	1月	女	昭和23年	3月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和36年	7月	ドイツへ 養子	7 /11/6) <u> </u>
242	昭和23年	2月	女	昭和23年	3月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和35年	3月	他の施設		
243	昭和21年	12月	女	昭和23年	3月	アメリカ	引渡	昭和30年		養女		
244	昭和23年	2月	女	昭和23年	3月	アメリカ	引渡	昭和26年	12月	他の施設		
245	昭和23年	2月	女	昭和23年	3月	父アメリカ 母(父スウェー デン、母日本人)	預り	昭和23年	4月	+	早産児	戸塚区聖母の園
246	昭和23年	3月	男	昭和23年	3月	アメリカ	引渡	昭和23年	3月	†	早産児	戸塚区聖母の園
247	昭和23年	3月	女	昭和23年	3月	アメリカ	引渡	昭和27年	6月	養女		
248	昭和21年	10月	女	昭和23年	3月	アメリカ	引渡	昭和23年	3月	他の施設		
249	昭和23年	3月	男	昭和23年	3月	アメリカ	引渡	昭和27年	11月	養子		
250	昭和22年	10月	女	昭和23年	3月	アメリカ	捨子	昭和25年	5月	他の施設		
251	昭和22年	2月	男	昭和23年	3月	アメリカ	引渡	昭和23年	4月	実母引取		
252	昭和23年	3月	女	昭和23年	3月	アメリカ	引渡	昭和24年	3月	他の施設		
253	昭和23年	3月	女	昭和23年	4月	アメリカ	引渡	昭和29年	4月	養女		
254	昭和22年	12月	男	昭和23年	4月	父中国人 母日本	引渡	昭和23年	9月	+	ヘルニア	戸塚区聖母の園
255	昭和23年	3月	男	昭和23年	4月	日本	引渡	昭和30年	5月	ボーイズターン		
256	昭和23年	4月	男	昭和23年	4月	日本	引渡	昭和30年	5月	ボーイズターン		
257	昭和23年	4月	男	昭和23年	4月	アメリカ	預り	昭和23年	9月	実母引取		
258	昭和23年	2月	女	昭和23年	4月	日本	引渡	昭和24年	11月	他の施設		
259	昭和23年	4月	男	昭和23年	4月	日本	預り	昭和25年	5月	実母引取		
260	昭和23年	4月	男	昭和23年	4月	日本	引渡	昭和30年	5月	ボーイズターン		
261	昭和23年	4月	女	昭和23年	4月	アメリカ	引渡	昭和29年	4月	養女		

入所番号	生年	月	性別	入所年	月	国籍(父の)	入所理由	退所年	月	退所理由	病名	埋葬地
262	昭和23年	3月	男	昭和23年	4月	日本	引渡	昭和23年	7月	+	消化不良	戸塚区聖母の園
263	昭和22年	8月	男	昭和23年	4月	アメリカ	引渡	昭和28年	9月	養子		
264	昭和23年	2月	男	昭和23年	5月	日本	引渡	昭和25年	9月	他の施設		
265	昭和22年	12月	女	昭和23年	5月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和23年	6月	+	ヘルニア	戸塚区聖母の園
266	昭和22年	2月	男	昭和23年	5月	日本	引渡	昭和23年	6月	他の施設		
267	昭和22年	1月	男	昭和23年	5月	アメリカ	引渡	昭和30年	3月	養子		
268	昭和22年	4月	女	昭和23年	5月	日本	捨子	昭和23年	5月	実母引取		
269	昭和20年	5月	女	昭和23年	5月	日本らしい	捨子	昭和23年	5月	+	急性肺炎	戸塚区聖母の園
270	昭和23年	4月	男	昭和23年	5月	日本らしい	捨子	昭和23年	5月	†	消化不良	戸塚区聖母の園
271	昭和23年	5月	女	昭和23年	5月	日本	引渡	昭和23年	5月	†	早産児	戸塚区聖母の園
272	昭和23年	4月	男	昭和23年	5月	日本(二世)	引渡	昭和25年	6月	他の施設		
273	昭和23年	4月	女	昭和23年	5月	日本	引渡	昭和24年	11月	他の施設		
274	昭和23年	2月	男	昭和23年	5月	日本	引渡	昭和23年	6月	†		戸塚区聖母の園
275	昭和23年	1月	男	昭和23年	5月	日本	引渡	昭和23年	8月	†	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
276	昭和23年	3月	男	昭和23年	5月	日本らしい	捨子	昭和25年	6月	他の施設		
277	昭和23年	5月	男	昭和23年	6月	日本らしい	捨子	昭和30年	5月	ボーイズターン		
278	昭和23年	4月	男	昭和23年	6月	アメリカ	引渡	昭和23年	6月	+	ヘルニア	戸塚区聖母の園
279	昭和23年	6月	女	昭和23年	6月	日本	預り	昭和23年	8月	+	消化不良	戸塚区聖母の園
280	昭和23年	6月	男	昭和23年	7月	アメリカ	引渡	昭和29年	1月	養子		
281	昭和23年	6月	男	昭和23年	7月	父朝鮮 母日本	引渡	昭和30年	5月	ボーイズターン		
282	昭和23年	6月	女	昭和23年	7月	アメリカ	引渡	昭和24年	3月	†	記載なし	
283	昭和22年	10月	女	昭和23年	7月	日本らしい	捨子	昭和30年	5月	養女		
284	昭和23年	7月	女	昭和23年	7月	日本らしい	捨子	昭和23年	8月	+	消化不良	戸塚区聖母の園
285	昭和23年	6月	男	昭和23年	7月	アメリカ	引渡	昭和25年	12月	養女		
286	昭和23年	6月	女	昭和23年	7月	日本	引渡	昭和24年	11月	他の施設		
287	昭和23年	3月	女	昭和23年	7月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和33年	9月	養女		
288	昭和23年	5月	男	昭和23年	7月	日本	引渡	昭和23年	8月	†	中毒	戸塚区聖母の園
289	昭和23年	7月	男	昭和23年	7月	アメリカ	引渡	昭和23年	8月	†	早産児	戸塚区聖母の園
290	昭和23年	6月	女	昭和23年	7月	アメリカ	引渡	昭和29年	12月	養女		
291	昭和23年	6月	女	昭和23年	7月	日本らしい	捨子	昭和24年	11月	他の施設		
292	昭和23年	3月	男	昭和23年	7月	日本	捨子	昭和29年	1月	他の施設		
293	昭和23年	7月	男	昭和23年	7月	アメリカ	引渡	昭和30年	5月	ボーイズターン		
294	昭和22年		女	昭和23年	7月	父日本 母オランダ	預り	昭和23年	9月	実母引取		
295	昭和23年	7月	女	昭和23年	8月	日本	捨子	昭和24年	6月	養女		
296	昭和23年	7月	男	昭和23年	8月	アメリカ(黒人)	捨子	昭和30年	5月	ボーイズターン		
297	昭和22年	10月	男	昭和23年	8月	日本	引渡	昭和23年	8月	†	消化不良	実父引取る
298	昭和23年	8月	男	昭和23年	8月	日本らしい	捨子	昭和30年	3月	養子		
299	昭和23年	2月	女	昭和23年	8月	日本	引渡	昭和24年	11月	他の施設		
300	昭和23年	7月	女	昭和23年	8月	アメリカ	引渡	昭和28年	9月	養女		
301	昭和23年	7月	女	昭和23年	8月	アメリカ	引渡	昭和29年	3月	養女		
302	昭和23年	7月	男	昭和23年	8月	アメリカ	引渡	昭和23年	8月	+	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
303	昭和22年	4月	女	昭和23年	8月	日本	引渡	昭和23年	10月	他の施設		
304	昭和23年	7月	男	昭和23年	8月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和30年	5月	ボーイズターン		
305	昭和23年	8月	女	昭和23年	8月	アメリカ	引渡	昭和29年	9月	養女		
306	昭和23年	8月	女	昭和23年	8月	日本	引渡	昭和24年	11月	他の施設		
307	昭和23年	8月	男	昭和23年	9月	アメリカ	引渡	昭和30年	5月	ボーイズターン		

入所番号	生年	月	性別	入所年	月	国籍(父の)	入所理由	退所年	月	退所理由	病名	埋葬地
308	昭和23年	9月	女	昭和23年	9月	日本	引渡	昭和24年	11月	他の施設	77374	生升地
309	昭和23年	8月	男	昭和23年	9月	日本	捨子	昭和23年	9月	実母引取		
310	昭和22年	7月	女	昭和23年	8月	日本	預り	昭和24年	10月	実母引取		
311	昭和22年	9月	女	昭和23年	9月	アメリカ	引渡	昭和28年	7月	養子		
312	昭和23年	3月	男	昭和23年	9月	日本	引渡	昭和23年	10月	†	消化不良	戸塚区聖母の園
313	昭和23年	8月	男	昭和23年	9月	日本らしい	捨子	昭和30年	5月	ボーイズターン	1010176	7.%四至身77回
314	昭和22年	1月	男	昭和23年	9月	アメリカ(黒人)	捨子	昭和32年	12月	養子		
315	昭和22年	9月	女	昭和23年	9月	日本	引渡	昭和23年	10月	他の施設		
316	昭和23年	9月	女	昭和23年	9月	アメリカ	預り	昭和24年	4月	実母引取		
317	昭和23年	6月	女	昭和23年	10月	父トルコ	預り	昭和23年	10月	実母引取		
210	IIZI AH OO AH	10 H	+-	планоод:	10 H	母日本	±∧.7	II774H 99 Æ:	10 H	+	冰小子占	古松区町以の圏
318	昭和23年	10月	女田田	昭和23年	10月	アメリカ	捨子	昭和23年	12月	* * 7	消化不良	戸塚区聖母の園
319	昭和23年	10月	男	昭和23年	10月	アメリカ	捨子	昭和30年	1月	養子		
320	昭和23年	9月	男	昭和23年	10月	日本	引渡	昭和30年	5月	ボーイズターン		
321	昭和23年	8月	男	昭和23年	10月	日本らしい	捨子	昭和23年	10月	養子		
322	昭和23年	8月	女	昭和23年	10月	アメリカ	引渡	昭和30年	5月	養子		<u> </u>
323	昭和23年	9月	男	昭和23年	10月	アメリカ	引渡	昭和23年	10月	†	早産児	戸塚区聖母の園
324	昭和23年	9月	女	昭和23年	11月	アメリカ	引渡	昭和28年	9月	養女		
325	昭和23年	10月	男	昭和23年	11月	アメリカ	引渡	昭和23年	12月	t	先天性梅毒	戸塚区聖母の園
326	昭和23年	4月	女	昭和23年	11月	アメリカ	捨子	昭和27年	8月	養女		
327	昭和23年	11月	女	昭和23年	11月	アメリカ	捨子	昭和27年	10月	養女		
328	昭和23年	11月	男	昭和23年	11月	アメリカ	引渡	昭和23年	11月	†	早産児	戸塚区聖母の園
329	昭和23年	12月	女	昭和23年	12月	アメリカ	引渡	昭和25年	5月	養女		
330	昭和23年	4月	男	昭和23年	12月	アメリカ	引渡	昭和24年	1月	†	小児結核	戸塚区聖母の園
331	昭和23年	6月	男	昭和24年	12月	アメリカ	捨子	昭和30年	7月	養子		
332	昭和23年	3月	女	昭和24年	1月	日本	預り	昭和24年	2月	実父引取		
333	昭和23年	11月	男	昭和24年	1月	アメリカ	捨子	昭和30年	9月	養子		
334	昭和24年	1月	男	昭和24年	1月	アメリカ	引渡	昭和29年	11月	養子		
335	昭和24年	1月	女	昭和24年	1月	日本	捨子	昭和27年	4月	他の施設		
336	昭和24年	3月	女	昭和24年	1月	日本	預り	昭和24年	5月	実母引取		
337	昭和24年	1月	女	昭和24年	1月	アメリカ	引渡	昭和29年	4月	養女		
338	昭和24年	12月	男	昭和24年	1月	アメリカ	預り	昭和24年	1月	実母引取		
339	昭和24年	1月	男	昭和24年	1月	アメリカ	引渡	昭和30年	5月	ボーイズターン		
340	昭和23年	1月	女	昭和24年	2月	日本	預り	昭和24年	6月	実父引取		
341	昭和24年	2月	女	昭和24年	2月	アメリカ	引渡	昭和28年	10月	養女		
342	昭和24年	1月	女	昭和24年	2月	アメリカ	引渡	昭和30年	9月	養女		
343	昭和24年	2月	男	昭和24年	2月	日本(二世)	引渡	昭和28年	5月	ボーイズターン		
344	昭和24年	2月	男	昭和24年	2月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和30年	1月	養子		
345	昭和23年	8月	男	昭和24年	2月	アメリカ	引渡	昭和25年	1月	養子		
346	昭和24年	2月	女	昭和24年	2月	アメリカ	引渡	昭和25年	7月	+	急性肺炎	戸塚区聖母の園
347	昭和24年	1月	女	昭和24年	3月	日本	預り	昭和25年	6月	+	急性肺炎	戸塚区聖母の園
348	昭和24年	3月	男	昭和24年	3月	アメリカ白	預り	昭和31年	5月	実母引取		
349	昭和24年	2月	女	昭和24年	3月	アメリカ	引渡	昭和27年	1月	養女		
350	昭和24年	3月	女	昭和24年	3月	日本	引渡	昭和27年	4月	他の施設		
351	昭和24年	1月	男	昭和24年	2月	アメリカ(黒人)	預り	昭和24年	7月	実母引取		
352	昭和24年	3月	男	昭和24年	3月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和24年	5月	†	早産児	戸塚区聖母の園
353	昭和23年		男	昭和24年	3月	日本	引渡	昭和24年	5月	養子		
ააა	四個25年		ガ	四和24平	3月	LI4*	プログ	四和24平	5月	食丁		

入所番号	生年	月	性別	入所年	月	国籍(父の)	入所理由	退所年	月	退所理由	病名	埋葬地
354	昭和24年	4月	男	昭和24年	4月	アメリカ	引渡	昭和27年	1月	養子	7/3/11	在升地
355	昭和24年	2月	男	昭和24年	4月	アメリカ	引渡	昭和29年	1月	養子		
356	昭和24年	5月	女	昭和24年	5月	アメリカ	引渡	昭和27年	11月	養女		
357	昭和20年	3月	女	昭和24年	5月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和27年	11月	養女		
358	昭和24年	3月	男	昭和24年	5月	日本	預り	昭和24年	10月	実母引取		
359	昭和24年	5月	男	昭和24年	5月	日本	預り	昭和25年	4月	実父引取		
360	昭和24年	2月	男	昭和24年	5月	アメリカ	引渡	昭和28年	9月	養子		
361	昭和24年	2月	女	昭和24年	5月	日本	捨子	昭和27年	4月	他の施設		
362	昭和24年	5月	男	昭和24年	5月	アメリカ	引渡	昭和28年	1月	養子		
363	昭和24年	6月	女	昭和24年	6月	アメリカ	捨子	昭和26年	5月	養女		
364	昭和24年	6月	男	昭和24年	6月	日本	捨子	昭和31年	3月	他の施設		
365	昭和24年	6月	女	昭和24年	6月	アメリカ	引渡	昭和27年	10月	養女		
366	昭和23年	10月	男	昭和24年	6月	日本	預り	昭和24年	7月	実母引取		
367	昭和24年	6月	女	昭和24年	6月	日本	引渡	昭和25年	4月	養女		
368	昭和24年	2月	男	昭和24年	7月	日本	預り	昭和24年	10月	実母引取		
369	昭和24年	7月	男	昭和24年	7月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和24年	7月	大母打取	早産児	戸塚区聖母の園
370	昭和23年	5月	女	昭和24年	7月	日本	捨子	昭和27年	4月	他の施設	十座儿	戸
371	昭和24年	8月	男	昭和24年	8月	日本	捨子	昭和24年	9月	実母引取		
372	昭和24年	5月	男	昭和24年	8月	日本	預り	昭和27年	11月	実父母引取		
373	昭和24年	8月	女	昭和24年	8月	アメリカ	引渡	昭和24年	9月	十	早産児	戸塚区聖母の園
374	昭和24年	8月	男	昭和24年	8月	日本	引渡	昭和31年	3月	他の施設	十座儿	戸
375	昭和24年	6月	男	昭和24年	8月	アメリカ	引渡	昭和30年	8月	養子		
376	昭和24年	8月	女	昭和24年	8月	アメリカ	引渡	昭和28年	8月	養子		
377	昭和21年	11月	男	昭和24年	8月	アメリカ	引渡	昭和30年	3月	他の施設		
378	昭和22年	2月	男	昭和24年	9月	アメリカ	引渡	昭和30年	9月	養子		
379	昭和22年	4月	男	昭和24年	9月	アメリカ	引渡	昭和27年	4月	養子		
380	昭和23年	1月	男	昭和24年	9月	アメリカ	引渡	昭和28年	4月	養子		
381	昭和23年	5月	男	昭和24年	9月	アメリカ	引渡	昭和30年	5月	他の施設		
382	昭和24年	7月	男	昭和24年	9月	アメリカ	引渡	昭和25年	10月	養子		
383	昭和24年	9月	女	昭和24年	9月	日本	引渡	昭和24年	10月	†	早産児	戸塚区聖母の園
384	昭和24年	8月	男	昭和24年	9月	アメリカ	引渡	昭和25年	8月	†	急性肺炎	戸塚区聖母の園
385	昭和23年	12月	女	昭和24年	9月	アメリカ(黒人)	預り	昭和24年	11月	実母引取	心口加火	户
386	昭和24年	9月	女	昭和24年	9月	日本	預り	昭和24年	10月	†	早産児	戸塚区聖母の園
387	昭和24年	9月	女	昭和24年 昭和33年 再入	9月	日本	引渡	32年・37年	12月 ·2月	養女	1 座儿	7 水口至亭 7 国
388	昭和25年	10月	男	昭和24年	10月	アメリカ	引渡	昭和26年	1月	養子		
389	昭和26年	11月	女	昭和24年	10月	日本	預り	昭和24年	12月	実父引取		
390	昭和27年	11月	女	昭和24年	11月	アメリカ	引渡	昭和28年	10月	養女		
391	昭和24年	12月	男	昭和24年	12月	アメリカ	預り	昭和25年	6月	実父母引取		
392	昭和24年	12月	男	昭和24年	12月	アメリカ(黒人)	預り	昭和25年	2月	実母引取	1	
393	昭和24年	12月	女	昭和24年	12月	アメリカ	捨子	昭和25年	7月	†	急性肺炎	戸塚区聖母の園
394	昭和24年	12月	女	昭和25年	1月	日本	捨子	昭和28年	7月	+	急性肺炎	戸塚区聖母の園
395	昭和25年	1月	男	昭和25年	1月	アメリカ	引渡	昭和25年	2月	養子		
396	昭和25年	1月	男	昭和25年	1月	アメリカ	引渡	昭和28年	8月	†	急性肺炎	戸塚区聖母の園
397	昭和24年	11月	女	昭和25年	2月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和25年	5月	実父引取		
398	昭和24年	11月	男	昭和25年	2月	父母朝鮮	預り	昭和25年	5月	実母引取		
0.00	-H1H417	11/1	///	-н-тн20-г	<i>2/</i> J	> C-2-131WL	125.7	-111120-7	0/1	ハテバベ		

7.07.50	11. 65	п	Mr. Dit	7 7 6	п	日然(()の)	7 55 70 4.	NUTT FO	п	AD ESCAMAL	, ii. /-	Im ette tel.
入所番号	生年	月	性別	入所年	月	国籍(父の)	入所理由	退所年	月	退所理由	病名	埋葬地
399	昭和25年	3月	男	昭和25年	4月	アメリカ	引渡	昭和25年	12月	養子		
400	昭和25年	4月	男	昭和25年	4月	日本	引渡	昭和32年	3月	他の施設		
401	昭和24年	12月	男	昭和25年	4月	アメリカ	引渡	昭和27年	12月	養子		
402	昭和25年	3月	女	昭和25年	5月	日本	引渡	昭和35年	10月	里親委託		
403	昭和25年	4月	男	昭和25年	5月	アメリカ	引渡	昭和28年	9月	養子		
404	昭和25年	4月	男	昭和25年	5月	アメリカ	引渡	昭和29年	8月	養子		
405	昭和25年	1月	男	昭和25年	5月	アメリカ	捨子	昭和25年	10月	t	消化不良	戸塚区聖母の園
406	昭和25年	5月	男	昭和25年	5月	日本	捨子	昭和29年	3月	養子		
407	昭和25年	5月	男	昭和25年	5月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和31年	2月	養子		
408	昭和23年	5月	男	昭和25年	6月	アメリカ	引渡	昭和30年	5月	ボーイズターン		
409	昭和25年	4月	女	昭和25年	6月	日本	引渡	昭和28年	4月	養女		
410	昭和25年	6月	男	昭和25年	6月	日本	預り	昭和26年	2月	実母引取		
411	昭和23年	4月	女	昭和25年	8月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和26年	12月	実母引取		
412	昭和25年	8月	女	昭和25年	8月	アメリカ	預り	昭和26年	2月	実母引取		
413	昭和25年	8月	男	昭和25年	8月	日本	預り	昭和32年	3月	他の施設		
414	昭和22年	4月	女	昭和25年	9月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和30年	7月	養女		
415	昭和24年	11月	男	昭和25年	9月	日本	預り	昭和25年	10月	+	結核性脳膜炎	実母引取る
416	昭和25年	6月	男	昭和25年	9月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和31年	8月	養子		
417	昭和24年	8月	女	昭和25年	9月	日本	預り	昭和26年	3月	実父引取		
418	昭和23年	8月	女	昭和25年	10月	日本	預り	昭和26年	10月	実父引取		
419	昭和21年	7月	女	昭和25年	10月	アメリカ	引渡	昭和26年	12月	他の施設		
420	昭和25年	4月	男	昭和25年	10月	アメリカ	引渡	昭和28年	8月	養子		
421	昭和25年	5月	男	昭和25年	10月	日本	預り	昭和26年	7月	†	小児結核	戸塚区聖母の園
422	昭和25年	10月	女	昭和25年	11月	アメリカ	捨子	昭和26年	7月	養女		
423	昭和22年	8月	女	昭和25年	11月	アメリカ	捨子	昭和29年	1月	実母引取		
424	昭和21年	10月	女	昭和25年	11月	アメリカ	引渡	昭和26年	7月	実父母引取		
425	昭和25年	10月	男	昭和25年	11月	アメリカ(黒人)	預り	昭和28年	12月	養子		
426	昭和25年	10月	男	昭和25年	11月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和32年	3月	他の施設		
427	昭和25年	11月	男	昭和25年	12月	父ノルウェー 母日本	引渡	昭和26年	2月	†	気管支肺炎	戸塚区聖母の園
428	昭和25年	10月	男	昭和25年	11月	アメリカ	捨子	昭和25年	12月	†	早産児	戸塚区聖母の園
429	昭和23年	10月	男	昭和25年	12月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和29年	8月	養子		
430	昭和25年	10月	男	昭和26年	1月	アメリカ	預り	昭和26年	9月	実母引取		
431	昭和26年	1月	男	昭和26年	1月	アメリカ	預り	昭和26年	5月	実母引取		
432	昭和26年	1月	男	昭和26年	2月	日本	預り	昭和28年	7月	実母引取		
433	昭和26年	1月	男	昭和26年	2月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和32年	3月	他の施設		
434	昭和25年	9月	男	昭和26年	2月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和32年	3月	他の施設		
435	昭和26年	1月	男	昭和26年	2月	日本	預り	昭和32年	3月	他の施設		
436	昭和25年	3月	男	昭和26年	3月	日本	捨子	昭和27年	7月	+	記載	なし
437	昭和23年	11月	女	昭和26年	3月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和28年	12月	養女		
438	昭和26年	2月	女	昭和26年	4月	アメリカ	捨子	昭和28年	5月	養女		
439	昭和26年	4月	男	昭和26年	4月	アメリカ	引渡	昭和29年	1月	養子		
440	昭和26年	4月	女	昭和26年	5月	日本	引渡	昭和29年	4月	養女		
441	昭和26年	4月	女	昭和26年	5月	アメリカ	引渡	昭和27年	6月	養女		
442	昭和26年	5月	女	昭和26年	6月	日本	預り	昭和26年	9月	実母引取		
443	昭和26年	6月	女	昭和26年	6月	アメリカ	預り	昭和26年	7月	実母引取		
444	昭和25年	1月	男	昭和26年	6月	アメリカ	預り	昭和26年	7月	実母引取		
111	нц/п4J-†	1/]	27	»Ц/[н/20- 1 -	0/1	1 / 1/4	1只り	нц/п420 - Т	1/1	大母刀似		

入所番号	生年	月	性別	入所年	月	国籍(父の)	入所理由	退所年	月	退所理由	病名	埋葬地
445	昭和26年	7月	女	昭和26年	7月	日本	預り	昭和27年	5月	実母引取		
446	昭和25年	3月	男	昭和26年	8月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和31年	3月	他の施設		
447	昭和26年	8月	男	昭和26年	8月	アメリカ	預り	昭和26年	12月	養子		
448	昭和26年	8月	男	昭和26年	9月	日本	預り	昭和27年	2月	実母引取		
449	昭和24年	9月	女	昭和26年	9月	アメリカ	預り	昭和30年	12月	実母引取		
450	昭和24年	1月	女	昭和26年	9月	日本	預り	昭和26年	12月	他の施設		
451	昭和25年	9月	女	昭和26年	9月	日本	預り	昭和35年	10月	里親委託		
452	昭和25年	7月	男	昭和26年	9月	アメリカ	預り	昭和26年	9月	実母引取		
453	昭和25年	8月	女	昭和26年	9月	日本	預り	昭和27年	8月	実母引取		
454	昭和26年	3月	女	昭和26年	9月	父母朝鮮	引渡	昭和39年	4月	施設変更		
455	昭和26年	8月	女	昭和26年	9月	日本	引渡	昭和36年	3月	他の施設		
456	昭和24年	4月	男	昭和26年	9月	アメリカ	引渡	昭和27年	5月	養子		
457	昭和23年	1月	男	昭和26年	10月	アメリカ(黒人)	預り	昭和26年	11月	実母引取		
	昭和26年	8月	男	昭和26年	10月	日本	預り	昭和27年	9月	養子		
458												
459	昭和26年	10月	女	昭和26年	10月	日本	預り	昭和27年	4月	実母引取		
460	昭和26年	8月	女	昭和26年	10月	アメリカ	預り	昭和27年	2月	養女		
461	昭和26年	8月	男	昭和26年	11月	日本	捨子	昭和28年	4月	実父引取		
462	昭和26年	3月	男	昭和26年	11月	フィリピン人	預り	昭和32年	3月	他の施設		
463	昭和26年	8月	男	昭和26年	12月	父母アメリカ	引渡	昭和26年	12月	†	頭部奇形児	実父母引取る
464	昭和26年	3月	男	昭和26年	12月	アメリカ	引渡	昭和27年	10月	養子		
465	昭和26年	12月	男	昭和26年	12月	アメリカ	引渡	昭和28年	9月	養子		
466	昭和27年	1月	男	昭和27年	1月	父母中国	引渡	昭和28年	2月	養子		
467	昭和27年	1月	女	昭和27年	1月	アメリカ	引渡	昭和27年	9月	養女		
468	昭和28年	11月	男	昭和27年	2月	父ロシア 母日本	捨子	昭和27年	3月	実父引取		
467	昭和27年	2月	女	昭和27年	2月	アメリカ	引渡	昭和27年	8月	養女		
468	昭和26年	12月	男	昭和27年	2月	アメリカ	引渡	昭和28年	3月	養子		
469	昭和27年	2月	女	昭和27年	3月	日本	引渡	昭和27年	3月	†	早産児	実母引取
470	昭和27年	2月	女	昭和27年	3月	アメリカ	捨子	昭和27年	6月	養女		
471	昭和27年	2月	男	昭和27年	3月	アメリカ	引渡	昭和27年	10月	養子		
472	昭和24年	9月	男	昭和27年	5月	父オーストラリア 母 (父ポルトガ ル、母日本)	引渡	昭和27年	11月	養子		
473	昭和27年	3月	男	昭和27年	5月	日本	捨子	昭和28年	1月	他の施設		
474	昭和27年	1月	男	昭和27年	5月	日本	引渡	昭和27年	5月	実母引取		
475	昭和27年	4月	男	昭和27年	5月	日本	引渡	昭和27年	1月	他の施設		
476	昭和27年	4月	女	昭和27年	5月	アメリカ	捨子	昭和27年	10月	養女		
477	昭和26年		女	昭和27年	6月	父チリー 母ドイツ	預り	昭和27年	7月	実母引取		
478	昭和23年	4月	女	昭和27年	7月	アメリカ(黒人)	引渡	昭和30年	12月	養女		
479	昭和27年	7月	女	昭和27年	7月	アメリカ	引渡	昭和28年	1月	養女		
480	昭和24年	9月	女	昭和27年	8月	アメリカ	預り	昭和27年	8月	実母引取		
481	昭和26年	1月	男	昭和27年	8月	アメリカ	預り	昭和27年	9月	実母引取		
482	昭和26年	6月	女	昭和27年	8月	日本	引渡	昭和35年	10月	里親委託		
483	昭和26年	8月	男	昭和27年	8月	日本	預り	昭和27年	9月	実父引取		
484	昭和27年	7月	女	昭和27年	8月	アメリカ	引渡	昭和27年	12月	†	嚥下性肺炎	戸塚区聖母の園
485	昭和27年	8月	女	昭和27年	8月	グアメリカ 母ハワイ	引渡	昭和28年	1月	養女	1 LL 1947	, WET-4-7E
486	昭和24年	2月	女	昭和27年	9月	アメリカ(黒人)	捨子	昭和28年	12月	実父引取		

入所番号	生年	月	性別	入所年	月	国籍(父の)	入所理由	退所年	月	退所理由	病名	埋葬地
487	昭和27年	8月	女	昭和27年	9月	アメリカ	引渡	昭和38年	8月	措置変更		
488	昭和27年	9月	女	昭和27年	9月	父母アメリカ	引渡	昭和27年	10月	†	先天性脳腫瘍	戸塚区聖母の園
489	昭和27年	8月	女	昭和27年	9月	日本	捨子	昭和33年	10月	アメリカ人 養子		
490	昭和24年	9月	女	昭和27年	9月	アメリカ	引渡	昭和28年	9月	養女		
491	昭和24年	4月	女	昭和27年	10月	アメリカ	引渡	昭和28年	7月	養女		
492	昭和27年	9月	女	昭和27年	11月	アメリカ(黒人)	捨子	昭和31年	12月	養女		
493	昭和27年	2月	女	昭和27年	12月	日本	捨子	昭和27年	12月	実父引取		
494	昭和26年	8月	女	昭和27年	12月	アメリカ	捨子	昭和30年	12月	養子として 行く		
495	昭和27年	7月	男	昭和27年	12月	日本	預り	昭和27年	12月	実母引取		

- ・病名、埋葬地欄以外の情報は聖母愛児園所蔵「児童動静簿1」の情報を基に記載した。
- ・病名、埋葬地欄は聖母愛児園所蔵「死亡台帳」の情報を基に記載した。
- ・入所年月日、退所年月日情報は、年月までを記載。入所番号は467,468番が重複しているが、原資料の表記に基づく。
- ・国籍欄には、黒人を現わす表記が複数あるため、「アメリカ(黒人)」に統一した。その他の表記は原資料の表記に基づく。
- ・「児童動静簿 1 」の退所理由欄に死亡を現わす十字架マークの記載があるが、「死亡台帳」に記載のない児童については、病名、 埋葬地欄に「記載なし」と記載した。

横浜都市発展記念館紀要 第17号

2022(令和4)年3月31日発行

編 集 横浜都市発展記念館

₹231-0021

横浜市中区日本大通12

TEL 045-663-2424

FAX 045-663-2453

発 行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

装 幀 木村 寛

印刷·製本株式会社佐藤印刷所